

2004年度  
講義計画

桃山学院大学

講 義 計 画

1003

講義計画

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育 学 概 論 (旧教育原理 I)	0 1	春学期	2 単位	竹 中 暉 雄
	0 2	秋学期	2 単位	
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>「教育職員免許法施行規則」で規定されている「教育の基礎理論」のうち、教育の理念並びに教育に関する歴史および思想を内容とする。</p> <p>これまで学校教育だけで12年間以上も教育を受けてきながら、いざ「教育とは何か」と改まって問われると極めて答えにくいものである。教育について考えるためには、人間について考えることから始めなくてはならない。なぜ人間だけ長期にわたる教育が必要なのか、そしてまたなぜそのことが可能なのだろうか。このような疑問に答えるためには、いま急速な発展を遂げつつある脳科学の助けが不可欠となる。</p> <p>その次に出てくるのは「ではどのような人間をつくるのか」という教育理念の問題である。教育の理念は時代とともに、社会とともに変化する。ルネッサンス以降における代表的な教育論者の見解について概観していくが、そのさいにおいても重要なことは、それらの諸見解と時代背景との関係である。</p> <p>教育学の学習において留意しておいてほしいことは、いわゆる決まりきった「正解」というものは存在しないということである。神秘性に満ちた人間についての学問なので、仕方のないことである。講義内容および各自が独自に仕入れた知識を比較検討して、自分自身の教育論を持つようにしてほしい。質問や意見は、質問票ないしE-mail (takenaka@andrew.ac.jp)、あるいはオフィス・アワーで受けつけます。積極的をお願いいたします。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>教育の本質</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 教育の一般的定義とその検討</li> <li>2 人間の教育必要性</li> <li>3 人間の脳と教育 その1</li> <li>4 人間の脳と教育 その2</li> <li>5 人間の脳と教育 その3</li> <li>6 教育上の人間関係</li> </ol> <p>教育理念の思想史</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7 近代教育の原理「合自然」</li> <li>8 ルソーによる「子どもの発見」</li> <li>9 「合自然」の流れと反「合自然」</li> <li>10 児童中心主義とデューイ教育学</li> <li>11 連続の教育と非連続の教育</li> <li>12 まとめ</li> <li>13 試験</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>論述試験による。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>教科書で引用文献・参考文献として掲げられているもの</p>			
<p>[教科書]</p> <p>竹中・中山・宮野・徳永『時代と向き合う教育学』ナカニシヤ出版、2003年改訂版 毎回、教科書に対応したレジュメを講義開始前に配布する（遅刻者には終了後）。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教 職 概 論 (旧教育原理 II)	0 1	春学期	2 単位	林 陸 雄
	0 2	秋学期	2 単位	
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>1997年の教育職員養成審議会答申を受けて教育職員免許法が改訂された。その改訂ポイントは、教科に関する科目を半減させ、それに替えて教職に関する科目の重視、とくに生徒指導力の向上と教職の使命感の高揚に力点が置かれたことだ。</p> <p>それを受けて、この科目も必修科目として新設されたのである。求められていることは、教職の使命感についての自覚と、教職への志向と一体感の形成・強化である。昨今の青少年が示す様々な教育問題の背景に、教員の在り方が種々取りざたされている。さらにこの困難な状況を克服するためにも、教員の在り方に対する厳しい目が注がれている。</p> <p>子どもの成長を援助し、子どもの成長をもって自己の喜びとする仕事が教職である。そのための基本的な思想・感性・知識・技能を修得していくためのガイドラインとして、この科目が位置づけられている。履修する以上、教職に就くという強い目的意識をもって受講してほしい。</p> <p>各種の学校を訪問し、参観、補助活動も課外に課す予定である。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職課程とは</li> <li>2. 求められる教師像</li> <li>3. 教師の仕事</li> <li>4. 学級経営 1</li> <li>5. 学級経営 2</li> <li>6. 教科経営 1</li> <li>7. 教科経営 2</li> <li>8. 教科外経営 1</li> <li>9. 教科外経営 2</li> <li>10. 校務分掌</li> <li>11. 服務</li> <li>12. まとめ</li> <li>13. テスト</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>毎回の小レポート、期末考査の結果を総合して行う。 ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>授業中に、適宜紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>使用しない</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育心理学	01 02	春 学 期 秋 学 期	2 単 位 2 単 位	冷 水 啓 子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年、学校では、不登校やいじめに加え、授業中私語に興じて教師の話を受けない、無断で立ち歩いたりふざげ合ったりして授業に集中できない、我慢ができて些細なことですぐに切れる、といった児童・生徒の行動傾向が問題視されている。では、このように日常的に起こりうる困難な事態に対し、教師はどのように対処すればよいであろうか。適切に対応するためには、子どもの発達の様相や一般的な教授・学習方法に精通しているうえに、さまざまな発達障害や問題行動への臨床援助に関する基礎的知識・理解やセンスをも併せもつ必要がある。すなわち、平常の授業を円滑に運営するだけでなく、問題の発生を未然に防いだり、起こった問題の原因を究明して解決へ導いたりするための知識・理解や技能、柔軟な判断能力や態度が必要とされるのである。</p> <p>そこで、この「教育心理学」では、生涯発達の観点から「乳幼児、児童・生徒の心身の発達および学習の過程」に関する基礎的理論と教育実践について学び、実践的指導力を身につけるための基礎作りを目指す。</p> <p>なお、これは、教育職員免許法により規定されている「教職に関する科目」の一つとして、本学教職課程で必修とされている随意科目である。授業に関連する補足資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などにより適宜提供する。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>はじめに</li> <li>生涯発達 <ol style="list-style-type: none"> <li>生涯発達とは</li> <li>発達の原理</li> <li>発達段階理論</li> </ol> </li> <li>乳幼児期 <ol style="list-style-type: none"> <li>乳幼児期における心身の発達</li> <li>発達障害とその臨床援助</li> </ol> </li> <li>児童期・思春期 <ol style="list-style-type: none"> <li>児童期・思春期の心理発達</li> <li>児童期・思春期の心理障害と臨床援助</li> </ol> </li> <li>青年期 <ol style="list-style-type: none"> <li>青年期の心理発達</li> <li>青年期の心理障害と臨床援助</li> </ol> </li> <li>全体のまとめ</li> </ol> <p>〔但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある〕</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>主体的・積極的な授業への出席・参加を重視する。学期中、必要に応じて簡単なレポート課題を与える。学期末には論述試験を実施する。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>藤永保(著)『幼児教育を考える』(岩波新書)  井上健治(著)『子どもの発達と環境』(東京大学出版会)  三浦香苗 他(編)『教員養成のためのテキストシリーズ2 発達と学習の支援』(新曜社)  大村彰道(編)『教育心理学Ⅰ—発達と学習指導の心理学—』(東京大学出版会)  下山晴彦(編)『教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学—』(東京大学出版会)  高橋恵子・波多野誼余夫(共著)『生涯発達の心理学』(岩波新書)</p>			
<p>[教科書]</p> <p>追って指示する。</p>	<p>他</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育方法学	01 02	春 学 期 秋 学 期	2 単 位 2 単 位	冷 水 啓 子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>この「教育方法学」では、子どもが知的好奇心や探求心をかき立てられながら主体的に学び、学ぶ楽しさ・充足感を味わうことのできる学習とは何かを考える。新しい学習指導要領では、「生きる力」の育成が重視されているが、それは「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」といった側面を持つ。したがって、ここでは、そのような能力を育成するための「教育の方法および技術」に関する基礎的理論と授業(教科学習および総合的な学習の時間)でのその活用法について学び、実践的指導能力を培うべき基盤作りを目指す。</p> <p>具体的には、はじめに、教授・学習活動および教育測定・学習評価に関する基礎的理論を概観し、子どもの学習意欲を促進させる効果的な教授・学習方法や教育メディアの特徴を学ぶ。つぎに、子どもの年齢や個性に即した学習過程を支援するためのコンピュータの教育利用を取り上げ、コンピュータ実習を通じてその実態を体験的に理解する。さらに、4年次に実施される教育実習では、ここで各自が習得した新しい教育メディアや教授・学習法を活用し、その効果を実際に確認してほしい。</p> <p>なお、これは教育職員免許法により規定されている「教職に関する科目」の一つとして、本学教職課程で必修とされている随意科目である。授業に関連する補足資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などにより適宜提供する。受講に際し、各自 Word や Excel などの基本的操作を習得しておくことが望ましい。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>教授・学習活動 <ol style="list-style-type: none"> <li>学習とはなにか <ol style="list-style-type: none"> <li>①条件づけ</li> <li>②認知理論と観察学習</li> </ol> </li> <li>学習と認知：推理と問題解決</li> <li>学習への動機づけと学習意欲：知的好奇心と内発的動機づけ</li> </ol> </li> <li>教授・学習過程 <ol style="list-style-type: none"> <li>授業における教授・学習過程</li> <li>個人差と学習指導</li> </ol> </li> <li>教育測定と学習評価 <ol style="list-style-type: none"> <li>教育測定</li> <li>学習評価</li> <li>心理テストの利用</li> </ol> </li> <li>コンピュータの教育利用：その理論と技法(コンピュータ実習を含む) <ol style="list-style-type: none"> <li>コンピュータの教育利用に関する諸問題</li> <li>インターネットの利用</li> <li>コンピュータを活用した報告書の作成</li> </ol> </li> <li>全体のまとめ</li> </ol> <p>〔但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある〕</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>主体的・積極的な授業への出席・参加を重視する。学期中、必要に応じて簡単なレポート課題を与える。学期末には論述試験を実施する。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>波多野誼余夫・稲垣佳世子(共著)『人はいかに学ぶか—日常的認知の世界—』(中公新書)  情報教育学研究会 他(編)『インターネットの光と影』(北大路書房)  三浦香苗 他(編)『教員養成のためのテキストシリーズ2 発達と学習の支援』(新曜社)  大村彰道(編)『教育心理学Ⅰ—発達と学習指導の心理学—』(東京大学出版会)  下山晴彦(編)『教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学—』(東京大学出版会)  多鹿秀継(著)『教育心理学—「生きる力」を身につけるために—』(サイエンス社)  梅本堯夫 他(編)『心理学—心のはたらきを知る—』(サイエンス社)</p>			
<p>[教科書]</p> <p>追って指示する。</p>	<p>他</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・地歴科教育法 (旧社会科教育法) (旧地理歴史科教育法)	01	通期	4単位	野尻 亘
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>学校教育現場では、いじめ・不登校・校内暴力・非行・差別などの諸問題に苦悩している。このような状況の中で、中学「社会科」・高校「地理歴史科」の教育や授業は、どのようにあるべきか。</p> <p>単に知識や技能の伝達に留まらず、新しい学力観をふまえた上で、人権教育・平和教育・環境教育・開発教育・国際理解教育といったテーマについて、地理歴史教育の再構築を目指すこととする。</p> <p>この授業は中学校社会科・高校地理歴史科教員免許取得の必修科目です。模擬授業や討論など、演習形式を採用して行います。教員免許取得の希望のない学生が履修しても苦痛となります。そのため、よく注意して履修手続きをしてください。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学校における教科教育 陶冶と訓育</li> <li>2. 地理歴史科の目標</li> <li>3. 地理歴史科のカリキュラム構成</li> <li>4. 教育実習と授業実践</li> <li>5. 授業指導案の作成と成績評価</li> <li>6. 地理歴史教育と人権学習・同和教育の実践</li> <li>7. 学校地理教育・歴史教育の目標と課題</li> <li>8. 生涯学習社会と地理歴史教育</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>指定した書式にもとづく「授業指導案」をレポートとして作成し提出する。このことを単位認定の基礎条件とする。演習形式。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>文部科学省『高等学校学習指導要領』国立印刷局 井原政純『社会・地理・公民科基礎論』多賀出版 永井滋郎・平田嘉三『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書</p>			
<p>[教科書]</p> <p>文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』大阪書籍</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・地歴科教育法 (旧社会科教育法) (旧地理歴史科教育法)	02	通期	4単位	山崎 充彦
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>地理・歴史科の教員免許取得希望者の必修単位である。知識の詰め込みに終始すると捉えられがちなこの教科の学習目標は、一体如何にあるべきかに留意しつつ、各自に模擬授業を行ってもらおう。もっぱら教員免許取得希望者を対象とし、模擬授業を中心とした演習形式とするので、教職希望しない者にとっては、苦痛を感じるかもしれない。その点、留意の上、登録履修されたい。</p> <p>なお、担当者の専門との関係上、歴史分野に重点をおきたいとは思いますが、地理分野に主たる関心を持つ者の登録履修も歓迎する。</p> <p>開講当初は、担当者が指導案作成などについて講義するが、この授業は、そもそもが教員免許取得希望者を対象とするものであり、履修者全員が模擬授業担当を義務づけられ、授業への積極的参加を要求される、いわゆる「演習形式」で行う。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、各自がそれぞれ学習指導案を作成する。</li> <li>2、その指導案に基づき、毎回一人に模擬授業を行ってもらおう。(原則50分授業)</li> <li>3、その際、当日の出席者全員に対して、レジュメとして指導案および当日の授業資料(教科書その他のコピーなど)を配布する。</li> <li>4、模擬授業終了後、出席者全員で、その授業の問題点について討議する。＝指導案の問題点、模擬授業と指導案との相違点、授業の問題点等々。→次回の模擬授業担当予定者が司会役を務める。</li> <li>5、当日の出席者は、その模擬授業についてのレポートを、当日ないしは翌週に提出する。</li> </ol> <p>模擬授業担当の日時については、開講当初に相談の上、決める。受講者の人数にもよるが、少数の場合、年に複数回、模擬授業の担当が当たることになるかも知れないので、その点、留意されたい。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>学習指導案の作成、模擬授業の内容、討論への参加、レポートの提出、出席回数、これらにより総合的に評価する。</p> <p>模擬授業の担当は、単位認定の必須条件である。</p> <p>模擬授業の担当日に無断欠席した者は理由の如何を問わず、その時点で「不可」と判定する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>文部科学省、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』、実教出版</p> <p>[教科書]</p> <p>教科書は使用しない。</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
社会科・公民科教育法 (旧社会科教育法) (旧公民科教育法)	01	通期	4単位	飯島敏文
<p><b>[講義概要・学習目標]</b> 本講義は中学校社会科及び高等学校公民科授業を実践できる基本的知識と能力を身につけることを目標とするものです。 社会科学・人文科学の諸領域を習得しただけでは授業実践はできません。生徒の発達段階や生活経験・学習経験を踏まえ、もつとも効果が期待できる教材を選択し、授業過程において生徒にどのような学習活動を行わせるのかということ具体的に構想しなければなりません。そこには常に生徒の公民的資質の育成という中核的な目標が位置づけられていなければなりません。 社会科・公民科という教科に対する誤解をとき、社会科・公民科という教科が何のために設けられているのかという原点に立ち返って授業実践を考えていただきたいと思ひます。情報化社会やニューメディアに対応したこれからの社会科・公民科授業を考えていきましょう。それは皆さんご自身が現代社会を生き抜く力を身につけることにもつながるものです。</p>	<p><b>[講義計画]</b> 本講義は通年の講義ですが、主として前期に中学校社会科に関する講義、後期に高等学校公民科に関する講義を予定しています。 前期は、昭和22年の社会科成立期から今日に至るまでの社会科を概観し、とくに成立期社会科におけるカリキュラム構成と授業実践について考察します。現代の社会科授業実践を考えるために有効な視点を可能な限り具体的な形で紹介することによって、授業を実践するとはいかなることであるかを解説します。 後期は、高等学校公民科の特徴と公民科に含まれる諸科目の特徴とその実践的課題について解説します。 前期・後期ともに受講生の皆さんが社会科授業及び公民科授業の学習指導計画を作成することができるように手ほどきをいたします。常に社会の姿を「授業」のレベルで考えることができるような視点を提供していく予定です。</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b> 出席状況、授業内小レポートの内容、及びレポート試験の内容を総合的に評価します。(前期・後期共レポート試験があります)</p>	<p><b>[参考文献]</b> 講義内においてその都度紹介します。必要最低限の文献についてはコピーを配布いたしますが、欠席者への再配布はいたしませんのでご了承ください。</p>			
<p><b>[教科書]</b> テキストは指定しませんが、下記図書は必須です。 『中学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領』 『中学校学習指導要領解説 社会編』 『高等学校学習指導要領解説 公民編』</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者														
社会科・公民科教育法 (旧社会科教育法) (旧公民科教育法)	02	通期	4単位	宮本進														
<p><b>[講義概要・学習目標]</b> 21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。地球の人口は約61億人、主権国家は190余である。その中で約13億人が1日1ドルで生きようと、約8億人が飢えに苦しみ、約12億人が安全な水を飲まず、約10億人が読み書きが出来ないなど、すべてが豊かな生き方、暮らしが出来ている訳ではない。日本は経済低迷の最中で、国民は漠とした不安の中にいる。また、地球の幾つかの地域では紛争中であり、日本もそれには無関係ではいられない。社会科・公民科は現代的な課題に向き合う重要な教科だと言える。教員の立場の人間としてどう向き合うのか、生徒達にどう向き合わせるのか。これを基本的問題意識として提起しつつ、教科の目的と役割、教育課程の変遷、教育課程の内容や教授方法などを考察しながら社会科・公民科教育の在り方を研究する。講義だけでなく、討論や、模擬授業などを取り入れた参加型の授業にしたい</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <table border="0"> <tr> <td>1. はじめに＝講義概要など</td> <td>13. 公民科の目標</td> </tr> <tr> <td>2. ～ 3. どの社会に生きてるのか</td> <td>14. 公民の概念と公民科教育</td> </tr> <tr> <td>4. 教員の現状</td> <td>15. ～ 17. 公民科指導要領の内容と授業</td> </tr> <tr> <td>5. ～ 6. 国旗・国歌問題と社会科・公民科教育</td> <td>18. ～ 19. 模擬授業の準備と学習指導案の作成</td> </tr> <tr> <td>7. ～ 8. 戦後の社会科・公民科教育</td> <td>20. ～ 24. 模擬授業による授業研究</td> </tr> <tr> <td>9. 社会科・公民科教育と社会認識・態度</td> <td>25. まとめ</td> </tr> <tr> <td>10. ～ 12. 社会科指導要領の内容と授業</td> <td>26. テスト</td> </tr> </table>				1. はじめに＝講義概要など	13. 公民科の目標	2. ～ 3. どの社会に生きてるのか	14. 公民の概念と公民科教育	4. 教員の現状	15. ～ 17. 公民科指導要領の内容と授業	5. ～ 6. 国旗・国歌問題と社会科・公民科教育	18. ～ 19. 模擬授業の準備と学習指導案の作成	7. ～ 8. 戦後の社会科・公民科教育	20. ～ 24. 模擬授業による授業研究	9. 社会科・公民科教育と社会認識・態度	25. まとめ	10. ～ 12. 社会科指導要領の内容と授業	26. テスト
1. はじめに＝講義概要など	13. 公民科の目標																	
2. ～ 3. どの社会に生きてるのか	14. 公民の概念と公民科教育																	
4. 教員の現状	15. ～ 17. 公民科指導要領の内容と授業																	
5. ～ 6. 国旗・国歌問題と社会科・公民科教育	18. ～ 19. 模擬授業の準備と学習指導案の作成																	
7. ～ 8. 戦後の社会科・公民科教育	20. ～ 24. 模擬授業による授業研究																	
9. 社会科・公民科教育と社会認識・態度	25. まとめ																	
10. ～ 12. 社会科指導要領の内容と授業	26. テスト																	
<p><b>[成績評価の方法]</b> 出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。</p>	<p><b>[参考文献]</b> 授業の中で適宜紹介する</p>																	
<p><b>[教科書]</b> 授業ノート・資料などをプリントして配付する。</p>																		

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
商業科教育法 (旧商業科教育法(2))		通 期	4 単位	松 原 勇
<b>【講義概要・学習目標】</b> 経営革新時代における商業科教員を目指す学生を対象にした高等学校教員免許取得のための必修科目である。現代の商業教育は、国際化・情報化に対応できる基礎学力を土台とした人材の育成が急務である。特に優れた職業倫理を身につけ、「心の充実」「思考力の強化」「高度な知識・技術」等の習得が不可欠である。21世紀に生きる人材は「アイデンティティ」「豊かな人間性」「一人一人の個性」等の生きる力の能力を十分に生かすことを大きな目標にしている。その趣旨を踏まえ、将来教育に携わる者は、常に教育理念を念頭におきながら、商業教育の本質に立脚した姿勢と自覚と責任をもって臨まなくてはならない。本講は、教育者としての人間力を磨くと共に産業経済の現状と将来の商業教育を展望しつつ、教育上の本筋を究明する。特に年間指導計画、毎時の学習指導案の作成、学習指導法、模擬授業など教育者が修得すべき方法論を重点的に網羅して講義する。	<b>【講義計画】</b> 1 商業教育の意義と目的 2 商業教育の変遷 3 現在の高等学校の商業教育 4 商業教育における国際化と情報化 5 教育課程の編成 6 学習指導法(模擬授業の展開) 7 学習指導計画と教育評価 8 教員の資質能力と研修制度 9 職業資格制度と検定試験制度 10 今後の商業教育の展望等			
<b>【成績評価の方法】</b> 主として、出席を厳しく重視して評価する。なお、模擬授業の実践面の評価、期末試験等も勘案のうえ、総合評価とする。	<b>【参考文献】</b> 高等学校学習指導要領解説(商業編)			
<b>【教科書】</b> 教員が用意する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語科教育法 I (旧英語科教育法)		通 期	4 単位	島田勝正
<b>【講義概要・学習目標】</b> 英語教員志望者を対象とする。英語科教育の基礎理論を概観するとともに、その理論の教育実践への適用を考察する。授業内容は第二言語習得論、英語教育目標論、指導課程論(シラバス論、授業計画)、指導方法論、指導技術論(4技能、文法、語彙)、教材論、測定評価論、学習者論、教師論と多岐にわたる。単に理論の紹介に終始せず明日の教育実践を射程に入れたワークショップを展開する。その中で受講者は学習の促進としての指導は如何にあるべきかを探求することになる。その体験は授業案作成、マイクロティーチングとして具現化される。本講義の主たる目的は、中学校、高等学校、大学等で経験した英語教育や英語学習を基盤に作り上げた「思い込み(belief)」から解放し、望ましい英語授業のあり方を自己評価、自己点検するための視点、観点を提供することにある。問題意識をもって授業に臨んでほしいので、毎回「課題」提出を課す。課された分担任は責任をもって果たすこと。授業は教科書の指定ページを読み、課題を終了していることを前提にすすめる。	<b>【講義計画】</b> 1. ガイダンス 2. 教授・学習・評価(教授の役割) 3. 第二言語習得論1(習慣形成理論と創造的構築) 4. 第二言語習得論2(学習転移) 5. 第二言語習得論3(誤答訂正) 6. 第二言語習得論4(インプット仮説) 7. 第二言語習得論5(形式教授の役割) 8. 言語能力の分類 9. 文法教授(意識化活動) 10. 第二言語習得論6(有標性理論、教授可能性理論) 11. 目標論1(コミュニケーション能力) 12. 目標論2(学習指導要領) 13. コミュニケーション方略 14. 定期試験 15. コミュニカティブアプローチ1(機能シラバスと文機能分析) 16. コミュニカティブアプローチ2(指導法) 17. スピーキング(情報差活動) 18. リスニング(背景知識の活性化) 19. リーディング(発問の種類と方法) 20. ライティング(談話) 21. 語彙(記憶術) 22. 授業案、授業分析 23. 観点別評価と評定(規準と基準) 24. テスティング1(妥当性、信頼性) 25. テスティング2(テスト項目改善) 26. テスティング3(技能判断) 27. テスティング4(項目分析) 28. 定期試験			
<b>【成績評価の方法】</b> * 得点配分は以下の通り。(1)課題1回3点×12回=36点 (2)レポート24点 (3)定期試験40点 * 次のいずれかに該当する場合は単位を認定しない。(1)原則として各学期2回を越えて欠席した場合 (2)定期試験を無断で欠席した場合 (3)レポートを提出しない場合	<b>【参考文献】</b> 1. 白畑他(著)『英語教育用語辞典』大修館書店 1999 2. Richards, J., J. Platt and H. Platt (eds.) <i>Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics: Third Edition</i> Longman. 2002. 3. 青木(編)『英語授業実例事典 I, II』大修館書店 1990, 1994 4. 山田、望月(編)『私の英語授業』大修館書店 1996 5. 青木(編)『英語授業の組立て』開隆堂 1990			
<b>【教科書】</b> 教科書: 青木(編)『新しい英語科教育法』現代教育社 2002 Course Notes: 島田勝正(編著) <i>Methods of Teaching English as a Foreign Language: Testing of Teaching (Third Edition)</i> (ガイダンス時に配布する。)				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
英語科教育法II		通 期	4 単位	島田勝正
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>1. 「英語科教育法I」の復習をする。</p> <p>2. 「英語科教育法I」で得た知見を基盤に、英語科指導のシミュレーションを行う。具体的には、授業案作成—授業提案—授業観察—授業批評—授業案の改善の過程を通して、英語授業の構成能力を練磨する。</p> <p>3. 観点別評価、目標評価等、評価のあり方を検討するとともに、評価の基礎データをj得るテスト作成能力を養成する。</p> <p>すべての授業は、単に理論の紹介に終始せず、「教育実習」を射程に入れた課題中心のワークショップとする。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>1. ガイダンス</p> <p>2-28. 毎回の授業を(1)「英語科教育法I」の復習、(2)英語の授業研究、(3)評価のあり方の3区分で行う。</p> <p>(2)については、春学期は特にテーマを設定しないが、秋学期はテーマを特定する。</p> <p>(3)については、春学期は評価全般を、秋学期はテスト項目改善を取り扱う。</p> <p>受講生全員にプレゼンテーションを課す。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>* 得点配分は以下の通り (1) 授業参加48% (2) プレゼンテーション20% (3) レポート32% * 次のいずれかに該当する場合は単位を認定しない。(1) 原則として各学期2回を越えて欠席した場合 (2) 授業提案をしない場合 (3) レポートを提出しない場合</p>	<p>[参考文献]</p> <p>1. 白畑他(著)『英語教育用語辞典』大修館書店 1999</p> <p>2. Richards, J., J.Platt and H.Platt (eds.) <i>Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics:Third Edition</i>.Longman. 2002</p> <p>3. 青木(編)『英語授業実例事典 I, II』大修館書店 1990,1994</p> <p>4. 山田、望月(編)『私の英語授業』大修館書店 1996</p> <p>5. 青木(編)『英語授業の組立て』開隆堂 1990</p> <p>6. Heaton, J. B. <i>Writing English Language Tests: New Edition</i>. Longman. 1988.</p>			
<p>[教科書]</p> <p>教科書：青木(編)『新しい英語科教育法』現代教育社 2002</p> <p>Course Notes：島田勝正(編著) <i>Methods of Teaching English as a Foreign Language: Testing of Teaching (Third Edition)</i> (英語科教育法Iで使用したもの)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
道徳教育の研究		秋学期	2 単位	徳 永 正 直
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年マスコミを賑わしている未成年者による凶悪犯罪や、援助交際、オヤジ狩り、学級崩壊、いじめ等の子どもたちの「荒れ」に対処するために、道徳教育のなご一層の充実強化が求められている。しかし、「道徳」授業の評判はあまりよくないようであり、文部科学省主導の「心のノート」にもいくつかの問題点がある。そこで何故「道徳」授業がつまらないのかを考え、子どもたちの問題行動の背景と原因をアリス・ミラーの「反教育学」をひとつの手がかりとして考察し、道徳性発達の理論に依拠した「道徳」授業の可能性を、教育的タクト論の視点から検討する。</p> <p>とかく問題が多いとされる「道徳」授業や道徳教育の課題設定のあり方について、各自が自分自身の見解を持つようになることが目標である。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>①「教育」の重要性と危険性</p> <p>②「道徳」授業批判(「心のノート」の意義と問題点を含む)</p> <p>③子どもの問題行動を考える。1980年以後の問題行動の変遷</p> <p>④アリス・ミラーの「反教育学」の立場から</p> <p>⑤道徳教育の課題 学習指導要領の解説と問題点</p> <p>⑥道徳性発達の理論 ピアジェ、コールバーグ等</p> <p>⑦ジレンマ資料に基づく「道徳」授業の意義と問題点</p> <p>⑧実際の授業の展開(ビデオ視聴)</p> <p>⑨教育的タクトによる「道徳」授業の可能性</p> <p>⑩賞罰問題と子どもの人権</p> <p>⑪この講義の総括と今後の課題の提示</p> <p>なお、④⑥⑨についてはそれぞれ二時間かけて解説する。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>定期試験で評価する。</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p> <p>徳永・堤・宮嶋・林・榎原著『道徳教育論—対話による対話への教育』(ナカニシヤ出版、2003年)</p>				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
特別活動論	01	春学期	2単位	小島 孝敏
<p>【講義概要・学習目標】</p> <p>第3次の教育改革と言われる現在の改革は、学校週5日制の完全実施や、「生きる力」と「ゆとり」をキーワードに、学びの力を育む・「心の教育」を目指している。現場では、創意工夫を重視した新学習指導要領が、順次に施行され教育改革の柱とされる「総合的な学習の時間」もスタートした。それを生かし支える教育活動が特別活動である。</p> <p>子どもたちの調和のとれた豊かな人間形成に係わる資質が特別活動の目指すもので、主体的学習の基盤である。全ての学習を統合・発展する特別活動の充実が、「特色ある教育・学校づくり」に欠かせない。「学校行事、児童・生徒会活動、学級活動、クラブ活動」は、自主的な集団活動を通じた生活体験が有効で、重要な役割を果たしている。特に、現代社会における閉ざされがちな子どもたちには、生活経験を開き、社会関係能力の向上や改善が求められている。そのため、まず教師自身が目標の諸能力を獲得する必要があり、指導上の「理論と実践力」を身につけなければなりません。</p> <p>この授業では、受講生自らの社会関係能力を涵養すると共に、特別活動の教育目標と内容を実践する場となります。地域の学校行事等に参加し、観察・部分実習することで実践面での理解を深め、併せて大学と地域との連携を深める目的で行います。従って、講義教室が学級活動そのものとなり、全て自主的なボランティアサービスで運営します。具体的には、「各校園の特色ある取組」の学習や、教育実習前のプレ演習を兼ねた「現場訪問や交流」。見学・観察・補助活動等の「実地体験学習」や、班別グループワークでの「ケーススタディ」や「プレゼンテーション」。小学生を迎えて、バリアフリー関連の「大学探検キャンパスガイド」。中学生対象の「進路講話や進路グループ相談活動」等。地域と連携した現地実践活動を多く採り入れます。</p> <p>限られた授業回数の中で集約的に展開するので、全出席を守り遅刻や早退のないことが望ましい。</p>	<p>【講義計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>○授業びらき：オリエンテーション。 ① 学習計画・グループ分け等。 ② 特別活動の内容と目標。</li> <li>○学校週5日制と新学習指導要領。 ① 大阪の教育改革の現状と課題。 ② 総合的な学習活動との関連。 ～〔国際化・環境問題・少子高齢化社会等〕。 ○教育課程と各領域別のポイント。 〔学校行事・クラブ活動・学級活動・生徒（児童）会活動〕。</li> <li>○各各校園の特色ある教育の事例～「あんな学校・こんな学校」VTR等。 ○総合的学習の演習～特色ある活動の取組と実践例・ゲスト講話等。 ○実地体験学習・交流活動～見学・観察・補助活動・キャンパスガイド・参観・進路指導講話の発表・進路指導相談等。</li> <li>○班別プレゼンテーション・評価とまとめ。</li> <li>○テスト。</li> </ol> <p>☆課題レポート。 実地体験活動のうち、具体的な内容について一つ以上のプログラムに参加し、観察補助活動を行う。その模様をレポートして提出する。書式は別に指定する。</p>			
<p>【成績評価の方法】</p> <p>出席状況、VS活動や発表、授業内での小レポート、期末レポートの結果等を総合して行う。但し、2/3以上の出席がなければ評価はしない。</p>	<p>【参考文献】</p> <p>授業の中で適宜紹介する。</p>			
<p>【教科書】</p> <p>「学級便り」・資料等の必要なプリント類は、その都度配付する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
特別活動論	02	秋学期	2単位	宮本 進
<p>【講義概要・学習目標】</p> <p>21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。また、幾つかの地域では紛争中であり日本もそれに無関係ではいられない。さらに、少子化、核家族化などが進むなかで、集団活動や人間関係をつくることが得意な生徒が増加していると言われる。これが生徒達の問題状況を生む背景ともなっている。特別活動は教科指導とともに教育課程に位置づけられている。その内容としてはホームルーム活動（中学校では学級活動）・生徒会活動・学校行事から構成される。目的は「集団や社会の一員としての態度を養うとともに、自己を生かす能力を養うこと」とされる。受講生自らがこの力をどう養うのかを提起しつつ、それぞれの内容について具体的な諸実践を考察し、特別活動のあり方を研究する。討論等を取り入れた参加型の授業にしたい。</p>	<p>【講義計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>はじめにー講義計画など</li> <li>戦前の特別活動</li> <li>指導要領における特別活動の目標と内容</li> <li>～6. 学級（ホームルーム）活動の実際とその基本的視点</li> <li>～8. 生徒会活動の実際とその基本的視点</li> <li>～10. 学校行事の実際とその基本的視点</li> <li>必修クラブの廃止と部活動の意義</li> <li>ボランティア活動の意味と意義</li> <li>まとめとテスト</li> </ol>			
<p>【成績評価の方法】</p> <p>出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。</p>	<p>【参考文献】</p> <p>授業の中で適宜紹介する</p>			
<p>【教科書】</p> <p>授業ノート・資料などをプリントして配付する。</p>				

資格  
～01

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
生徒指導法	01	春学期	2単位	宮本進
<b>[講義概要・学習目標]</b> 21世紀初頭の地球は科学技術、情報技術の進歩、経済活動の多国籍化、地球環境の悪化など急激な変化の最中にある。幾つかの地域では紛争中であり日本もそれに無関係ではいられない。また、日本経済は低迷中である。生徒達は将来への予測が難しく、目標が見えにくい。特に、将来の進路への漠とした不安の中にある。それが生徒達の種々の問題状況を生む背景ともなっている。生徒指導は教科指導以外の指導のことであり、その内容は学業指導・進路指導・個人的適応指導・社会性指導・余暇指導・健康、安全指導などの領域がある。究極の目的は「自らの生き方を構築する自己指導力の育成」にあると言える。受講生自らがこの力をどう養うのかを提起しつつ、進路指導の領域に重点を置きながら各領域について具体的な諸実践を考察し、生徒指導のあり方を研究する。討論等を取り入れた参加型の授業にしたい。	<b>[講義計画]</b> 1. はじめに - 講義計画など 2. 教育の原点と生徒指導 3. 生徒達を取り巻く社会状況と生徒指導 4. どんな教員に 5. 個人的指導力と組織的指導力と生徒指導 6. ~ 8. 生徒指導の実際と原理・原則 9. ~ 12. 進路指導の実際と原理・原則と生徒指導 13. まとめとテスト			
<b>[成績評価の方法]</b> 出席回数、授業内での発表、小レポート、期末レポートなどを総合して行う。但し2/3以上の出席がない場合は評価しない。	<b>[参考文献]</b> 授業の中で適宜紹介する			
<b>[教科書]</b> 授業ノート・資料などをプリントして配付する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
生徒指導法	02	秋学期	2単位	辻川信孝
<b>[講義概要・学習目標]</b> 今、学校は様々な問題を抱えている。いじめ、不登校、学級崩壊、校内暴力、高校中退など生徒指導上の問題が多発し、学校教育のあり方が問われている。一方、新しい教育のあり方が議論され、個性重視、生きる力の育成、学校週5日制への対応等、生徒指導の新しい課題も指摘され、教育改善の取り組みがすでに始まっている。 このような状況の中で、教育実践者に、これら生徒指導上の問題の本質をとらえる目と個々の子どもに必要な援助方法を身につけることが求められている。本授業では、学校現場の事例を中心に、参加型の授業を進めていきたい。事例から、問題の本質を見つけ、自分なりの考えをまとめ、グループワークにより、問題解決に向けての考え方(法則性)を習得してもらいたい。 併せて、数多くの事例に接することにより、適切な対応(生徒指導の技術)と子どもたちに接する姿勢(生徒指導の心)を学びとってほしい。	<b>[講義計画]</b> 1. 生徒指導とは ①授業計画と進め方 ・子どもたちの状況と生徒指導のあり方 2. 事例研究(学校現場の実践から学ぶ) ①校則・生徒心得 ②いじめ ③不登校 ④授業妨害・学級崩壊 ⑤校内暴力 ⑥性に関する問題行動 3. 求められる生徒指導 ①子どもたちへのかかわり方 ②楽しい授業づくり ③生き方としての進路指導(職場体験学習) ④学級経営に生かせるカウンセリングの演習 ⑤地域と一体の子育て支援活動 4. まとめ			
<b>[成績評価の方法]</b> 出席状況、期末の最終レポートの結果を総合的に評価して行う。ただし、2/3以上の出席がなければ評価しない。	<b>[参考文献]</b> 授業の中で適宜紹介する。			
<b>[教科書]</b> 毎時間、プリントを配布する。				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育相談	01 02	春学期 秋学期	2単位 2単位	林 陸雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>中央教育審議会の答申に示された目標「『生きる力』を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心、正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくむ」方策と呼応するのが、教員免許法の改定であり、新設された必修科目「教育相談」である。</p> <p>現代社会の諸矛盾は直接・間接に子どもたちの生活に影響し、子どもたちを強いストレス下においている。その結果として、様々な神経症や心身症が小学生段階から現出している。これらの諸現象は、本人または家族に起因するとみられ勝ちであり、いっそう子どもたちを追い詰め苦しめている。</p> <p>子どもたちが抱え込んでいる諸問題を教育相談という観点からとらえ直し、適切な支援・援助をする窓口としての機能を学校教育相談活動として位置づけたい。その機能を遂行するための基礎・基本について概説する。履修する以上、必ず教職に就くという強い目的意識を持って受講すること。</p> <p>なお、より理解を深めるために体験学習をも採用する予定である。教育相談機関での参観と実習も課外プログラムとして組む予定である。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業びらき・生徒指導・教育相談とは</li> <li>2. 生徒指導の体制・教育相談の体制</li> <li>3. 問題の把握・問題の理解 1</li> <li>4. 問題の把握・問題の理解 2</li> <li>4. 教師・生徒関係</li> <li>5. カウンセリング 1</li> <li>6. カウンセリング 2</li> <li>7. カウンセリング 3</li> <li>8. カウンセリング 4</li> <li>9. 関係機関との連携</li> <li>10. 学校不適応・いじめと孤立</li> <li>11. 非行・勉強嫌い・無気力</li> <li>12. 神経症・心身症</li> <li>13. テスト</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>毎回の小レポート、期末考査の結果を総合して行う。 ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>授業中に、適宜紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>高野清純 監修 佐々木雄二 編 『図でよむ心理学 生徒指導・教育相談』 福村出版</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
教育実習 I (旧教育実習)	01 02 03	春学期 春学期 春学期	3単位 3単位 3単位	島田勝正 冷水啓子 竹中暉雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>教育実習 I とは、教職課程で履修してきた学習内容を現実の教育現場に立って実地に検証するものである。これは、実習校での実地実習(2週間)とその前後の学内実習とで構成され、両者あわせて「教育職員免許法施行規則」により求められた3単位となる。中学校免許、高校免許共に必修である。</p> <p>はじめに、学内での事前実習において、教育実習に臨むための基礎的な条件を再確認し、授業に必要な基本的理論と技術を習得する。次いで、教育の現場で、教員としての社会的責任を自覚したうえで、授業実習、学級経営、特別活動や課外活動の指導などを実地に体験する。実習上の要件を満たせない場合、途中で実習を打ち切られたり、実習の評価をしてもらえなくなることもあるので、学校長をはじめ各教員による指導にしたがい、慎重に行動することが必要である。再び学内に戻ってからの事後実習では、自己の実習経験をふまえて模擬授業に臨む。また、他の実習生や本学卒業生の体験談などをもとに実地実習内容を再点検し、教職課程全体についての自己評価を行なう。</p> <p>なお、この教育実習 I は、教師として、また社会人としての基礎的条件に関する実地訓練である。したがって、事故または疾病など正当な理由がない限り、遅刻・早退・欠席は原則として認められない。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 事前実習：模擬授業</li> <li>3. 事前実習：模擬授業</li> <li>4. 事前実習：模擬授業</li> <li>5. 事前実習：模擬授業</li> <li>6. 事前実習：模擬授業</li> <li>7. 事前実習：模擬授業</li> <li>8. 実地実習</li> <li>9. 実地実習</li> <li>10. 実地実習又は事後実習</li> <li>11. 事後実習：実習報告</li> <li>12. 事後実習：講話</li> <li>13. まとめ</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>実習校による評価票、実習簿、および学内実習の評価に基づいて、教職課程委員会にて総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>池田、酒井、野里、宇井(編著)『教育実習総説』(学文社) 白井、寺崎、黒澤、別府(編著)『教育実習57の質問』(学文社)</p>			
<p>[教科書]</p> <p>桃山学院大学教職課程委員会(編) 『教職をめざして——教職課程履修ガイド [2000年度改訂版] ——』</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教育実習 II		集中コース	2 単位	林 陸雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>教育実習 II とは、教育実習 I と共に中学校免許の必修科目である。教職課程で履修してきた学習内容、特に生徒指導や特別活動・部活動など学校教育活動全般にわたる事項について、現実の教育現場に立って実地に検証するものである。その実施形態には、出身校において春学期の教育実習 I と継続して計 3 週間（4 週間相当分）実施するものと、実習協力校において地域連携型で年間を通して実施するものがある。その違いは 3 年次に行う実習依頼時の内諾内容によって決定される。中学校免許には教育実習 I（3 単位、うち中学・又は高校で 2 週間相当分の 2 単位）と教育実習 II（2 単位、2 週間相当分）の両者あわせて「教育職員免許法施行規則」により求められた 5 単位となる。</p> <p>履修登録は春学期に行うが、3 年次の実習依頼内諾結果によって、出身校で 3 週間通しの実習になるか、実習校と協力校での 2 校組み合わせになるかを確定する。4 年次の春学期に提出する実習本登録票に従って、教育実習 I のクラス編成をする。実習 II に該当する指導内容については、教育実習 I のクラス、時間外における特別ガイダンス及び個別指導等において行う。</p> <p>実地実習においては、教員としての社会的責任を自覚したうえで、学級経営、特別活動や課外活動の指導などを実地に体験する。実習上の要件を満たせない場合は、途中で実習を打ち切られたり、実習の評価をしてもらえなくなることもあるので、学校長をはじめ各教員による指導にしがたい、慎重に行動すること。</p> <p>なお、この教育実習では、一貫して、教師としての基礎的条件に関する実地訓練がその基盤となる。したがって、事故または疾病などによる正当な理由がないかぎり、遅刻・早退・欠席は認められないので注意すること。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 実地実習</li> <li>3. 実地実習</li> <li>4. 実地実習</li> <li>5. 実地実習</li> <li>6. 実地実習</li> <li>7. 実地実習</li> <li>8. 実地実習</li> <li>9. 実地実習</li> <li>10. 実地実習</li> <li>11. 実地実習</li> <li>12. 実地実習</li> <li>13. 実地実習</li> <li>14. 実地実習</li> <li>15. まとめ</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>実習校による評価表、実習簿、および学内実習の評価に基づいて、教職課程委員会にて総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>池田、酒井、野里、宇井（編著）『教育実習総説』（学文社） 白井、寺崎、黒澤、別府（編著）『教育実習57の質問』（学文社）</p>			
<p>[教科書]</p> <p>桃山学院大学教職課程委員会（編） 『教職をめざして——教職課程履修ガイド [2000年度改訂版] ——』</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
教職演習	01 02 03	秋学期 秋学期 秋学期	2 単位 2 単位 2 単位	島田勝正 冷水啓子 竹中暉雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>国際化時代・グローバル化時代の今日、世界の人々の日常生活が国境を越えて多様に影響し合っている事実を認識し、世界市民の一人として国際社会と関わり合っていく感性と行動力の育成は極めて重要な課題である。教職を目指し、時代を担う児童・生徒の育成に当たろうとするものとして、この感性と行動力の育成は基本的な課題といえる。</p> <p>個別的な課題としては、人間尊重・人権尊重の精神を基礎に、地球環境、情報化、異文化理解、民族対立、地域紛争と難民、人口と食料、男女共同参画、少子化、高齢化と福祉、障害者理解と共生、家庭のあり方等の諸問題があげられよう。「人類に共通する地球的課題とは何か」を共通テーマに、各自がいずれかの個別課題について検討し、それらの内容を発達段階に応じて生徒にどのように教えるのかという授業案を提示し（模擬授業を含む）、討議するといった演習形式で展開する。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業目標と方法について テーマ群の概略紹介と各自のテーマ決定</li> <li>2. 学校現場での実践例の研究（ゲスト講師）</li> <li>3. 学校現場での実践例の研究（ゲスト講師） （講師の都合により日程変更の可能性あり）</li> <li>4. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>5. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>6. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>7. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>8. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>9. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>10. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>11. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>12. 個別テーマ授業案についての発表と討議</li> <li>13. まとめ</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席、報告、討議への参加度、授業毎の小レポート、最終レポート等によって総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>その都度、紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>使用しない。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
視聴覚教育		秋学期	2単位	冷水啓子
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>情報社会の進展に伴って、人々を取りまく教育・社会的環境が急速に変化しつつある。家庭、学校、地域社会において、衛星放送、ケーブル・テレビ、字幕番組、地上デジタル放送などの普及により、テレビ利用の選択肢がさらに広がった。また、さまざまな電子メディアが導入され、日常的にそれらに接する機会が増えた。コンピュータ・ネットワークやインターネットを通じて、情報の検索や受信を行うだけでなく、情報発信さえも容易にできるようになり、時間や空間を越えた幅広いコミュニケーション活動が可能となった。そのため、このような視聴覚メディアを媒介として情報を適切に理解し、利用し、産出する能力（マルチメディア・リテラシー、情報活用能力、情報倫理など）の育成が、新たな教育課題として重要視されるようになった。</p> <p>そこで、この「視聴覚教育」では、「視聴覚教育とメディア」に焦点を絞り、視聴覚教育メディアの発展と特徴、それらを活用した学習支援の方法を検討する。さらに、それらの利用に際する問題点およびその教育的可能性と限界についても考察を行う。具体的には、はじめに講義中心の授業を行い、つぎにコンピュータ実習（インターネット利用および PowerPoint によるプレゼンテーション教材の企画・制作）を行う。</p> <p>なお、授業に関連する資料は、コンピュータ、OHC、VTR、印刷物などを通じて適宜提供する。受講に際し、各自 Word や Excel などの基本的操作を習得しておくことが望ましい。受講生の主体的・積極的な授業参加を期待している。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>視聴覚教育および視聴覚教育メディアの発達       <ol style="list-style-type: none"> <li>視聴覚教育および視聴覚教育メディアとは何か</li> <li>視聴覚教育メディアの変遷</li> <li>活字・印刷物の利用：テキスト、絵本、児童書など</li> <li>テレビとビデオの利用：その利用形態と社会・教育的役割           <ol style="list-style-type: none"> <li>①テレビと子ども</li> <li>②幼児教育番組</li> <li>③字幕や手話通訳つき番組</li> </ol> </li> </ol> </li> <li>コンピュータの発展と教育利用（コンピュータ実習を含む）       <ol style="list-style-type: none"> <li>1) コンピュータ・ゲーム：子どもの発達と学習への影響</li> <li>2) コンピュータの教育利用：CAI、CMI</li> <li>3) インターネットの利用</li> <li>4) コンピュータ・リテラシーや情報活用能力の育成</li> <li>5) コンピュータ利用をめぐる教育・社会的諸問題</li> </ol> </li> <li>視聴覚教育メディアの活用：プレゼンテーション教材制作       <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 教育目標・内容の設定および制作方法の企画</li> <li>2) 資料集めおよび制作作業</li> </ol> </li> </ol> <p>〔但し、授業の進捗状況によってこの計画内容を変更することがある〕</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>主体的・積極的な授業への出席・参加を重視する。学期中必要に応じて簡単なレポート課題を与える。学期末には、制作したプレゼンテーション教材および修了レポートの提出を求める。それらの結果に基づき総合的に評価を行う。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>情報教育学研究会 他（編）『インターネットの光と影』（北大路書房）        水越敏行・佐伯伸（編）『変わるメディアと教育のありかた』（ミネルヴァ書房）        無藤隆（編）『テレビと子どもの発達』（東京大学出版会）        永田元康 他（著）『情報教育概論』（コロナ社）        中島義明（著）『映像の心理学—マルチメディアの基礎—』（サイエンス社）        （財）日本視聴覚教材センター（編）『視聴覚教材メディアの活用』        野津良夫（編）『視聴覚教育の新しい展開（第2版改訂版）』（東信堂）        高島秀之（編）『教育とデジタル革命』（有斐閣選書） 他</p>			
<p>[教科書]</p> <p>追って指示する。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
同和教育論	01	通 期	4単位	黒 田 伊 彦
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>「21世紀は人権の世紀である。」といわれている。「人権教育のための国連10年」の最終年となり、その総括と新たな取り組みが問われている。また、「人権教育及び人権啓発の推進法」も実施され、人権教育の広がりや深さを支える同和教育のあり方が問われている。</p> <p>春期は、部落への差別偏見の由来や今も部落差別が続いている要因、部落の起源や部落差別への闘いの歩みから、部落へのマイナスイメージをプラスイメージに転換していく事実と視点を明らかにする。</p> <p>秋期は、同和教育の歩みから融和教育、同和教育、解放教育の違い。「いじめ」を克服する同和（解放）教育のあり方及び部落悲慘史論・低位性論を克服する部落問題学習のあり方を考察し、部落問題の教科書記述批判や学習教材、集団主義と仲間づくり、学力保障と進路保障、反戦平和教育と部落問題など、反差別・人権教育の現状と方向性を明らかにする。</p> <p>教員採用試験の同和・人権教育関係問題の演習を行う。</p> <p>教科書、補充プリント、映像資料を用いる。</p> <p>春期は島崎藤村の「破戒」の課題研究と読書感想文。原作と映画との比較についてのレポート提出を課す。</p> <p>秋期は「いじめ」を克服する教師のあり方についての資料によるレポートを課す。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>〈春期〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>映画「夜明けをめざして」と「人権教育のための国連10年」で培うものから、同和（解放）教育のあり方を考える。</li> <li>部落差別を支えるケガレ意識の由来と日常性</li> <li>気づいていない部落差別—「けじめ」「ヤブ医者と解体新書」等</li> <li>部落差別の本質—部落差別が今も続いている理由</li> <li>部落の起源—近世封建社会の形成と「かわた」</li> <li>「」 — 一向一揆と近世封建社会の賤民制</li> <li>部落差別との闘い— 洗染一揆 VTR「触れ書き一揆」</li> <li>洗染一揆の学習教材化、劇、史跡調査など</li> <li>解放令と身分差別の再編成—部落差別と天皇制</li> <li>映画「破戒」（119分）の前半</li> <li>映画「破戒」の後半、スライド「破戒の風土—藤村と部落問題」</li> </ol> <p>〈秋期〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>西光万吉と全国水平社— VTR「よき日のために」</li> <li>戦争と全国水平社— 西光万吉の皇産主義 ・松本治一郎の「世界の水平運動」批判</li> <li>部落解放の方策と「ねた子を起こすな論」批判</li> <li>戦前の融和教育— 伊東茂光と崇仁教育 「同和」の語源と戦時の同和教育</li> <li>戦後の同和（解放）教育の歩みと人権総合学習</li> <li>「いじめ」の原因とそれを克服する同和（解放）教育と教師のあり方。</li> <li>部落問題学習の基本的視点—部落悲慘史論の克服を「教科書無償化を勝ちとった部落の子供たち」の教材から考える。VTR「天気になあれ」</li> <li>差別と偏見— VTR「青い目、茶色い目」</li> <li>差別と差別意識の働き—差別事象の共通性</li> <li>教員採用テストの人権・同和教育問題演習</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>春期はテストと「破戒」に関するレポートと出席点で評価する。        秋期はテストと「いじめ」に関するレポートと出席点によって評価する。        出席を重んじる。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>黒田 伊彦（著）『部落史紀行』（柘植書房新社）        中野 隆夫・池田 寛・中尾 健次・森 実（著）『人権教育をひらく 同和教育への招待』（解放出版社）        藤田 敬一（編）『「部落民」とは何か』（阿吽社）</p>			
<p>[教科書]</p> <p>黒田 伊彦（編著）『部落問題・人権・同和教育教材集』（柘植書房新社）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
同 和 教 育 論	0 2	通 期	4 単 位	寺 木 伸 明
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>本講義では、まず同和教育とはどのような教育をいうのかを説明し、そしてそもそも同和教育は必要なのか、ということについて共に考えてみたい。</p> <p>次に、現在、部落の子供たちをとりまく、生々しい差別の実状について、ビデオなどを見ながら理解を深めていきたい。そうした現実を踏まえて、現在、小学校・中学校・高校でどのような同和教育の実践が行われているのかを説明する。その際、中学校と高校の先生にゲスト講師としてきていただき、教育現場での取り組みの現状を報告していただく予定である。</p> <p>つづいて、同和教育の歴史、部落問題学習の実際の進め方などについて、最近の研究成果を踏まえて講義する。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 同和教育とは何か</li> <li>2 同和教育は必要か</li> <li>3 被差別部落の子供をとりまく差別の現状</li> <li>4 中学校における同和教育の実践（ゲスト講師予定）</li> <li>5 高校における同和教育の実践（ゲスト講師予定）</li> <li>6 同和教育の歴史</li> <li>7 部落問題学習指導の実際</li> <li>8 同和教育の成果と課題</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>前期のレポートおよび学年末の試験の成績を基本にして出席点（適宜、出席カードに簡単な感想を書いてもらう）を加味して総合的に評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>稲垣有一・寺木伸明・中尾健次『部落史をどう教えるか』解放出版社 寺木伸明・野口道彦編『部落問題論への招待 資料と解説』解放出版社</p>			
<p>[教科書]</p> <p>中野陸夫・池田寛・中尾健次・森実『同和教育への招待』解放出版社</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
図 書 館 経 営 論		秋 学 期	2 単 位	志 保 田 務
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>図書館の経営について学ぶ。図書館の経営とはどういうことであろうか。</p> <p>それぞれの図書館は、他の図書館と比べると何らかの違いを有する。資料に着目した場合、蔵書量の豊かな図書館があり、あるいは幅広く雑誌・新聞を集めている図書館がある。図書館活動に着目すると、資料貸出し量重点の図書館が多いが、他方にレファレンス、集会など施設を拠点として活動する図書館がある。施設面に注目すると、大きな本館を築き活動する図書館がある一方、分館の設置や、移動図書館に力を入れる図書館がある。専門の司書をそろえた図書館がある一方、人材派遣に頼る図書館もある。これらは公共図書館を土台にした例であるが、大学、学校図書館の事情は随分異なる。また多様である。</p> <p>このような、図書館ごとの特徴は多分に伝統など過去に起因している。だがそれならば、近未来の各図書館像の如何は現在の図書館経営者の策・実行にかかるといふことになる。各館はサービス計画を立て、実行に移す。その間には経費（人手、資料等）の予算化が必要となる。最後に活動の効果測定、計画の評価をし、次の対策に入る。図書館経営論ではこうしたことについて考える。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「図書館経営論」ガイダンス（講義計画説明）</li> <li>2. 「図書館経営論」の位置付け（図書館法施行規則における）</li> <li>3. 「図書館経営」の意味、意義・必要性</li> <li>4. 図書館経営論の沿革</li> <li>5. 図書館経営の原則</li> <li>6. 図書館サービス計画と経営計画</li> <li>7. 図書館の経営管理組織</li> <li>8. 館種別考察</li> <li>9. 図書館活動及び図書館経営の評価</li> <li>10. パフォーマンス指数</li> <li>11. まとめ</li> <li>13. テスト</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>テスト80% 課題 20%</p>	<p>[参考文献]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 高山正也編著『図書館・情報センターの経営』（勁草書房）</li> <li>2) 高山正也編著『図書館経営論』（樹村房）</li> </ol>			
<p>[教科書] 使用しない（プリント等による）。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報サービス概説		春学期	2 単位	西 田 文 男
<b>[講義概要・学習目標]</b>  図書館における情報サービスの意義を明らかにし、レファレンスサービス、情報検索サービス等について総合的に解説する。	<b>[講義計画]</b>  1. 情報サービス一般の広がり図書館が行う情報サービスの位置づけ 2. 図書館における情報サービスの意義と種類（レファレンスサービス、レファレンスサービス、カレントアウェアネスサービス等） 3. 情報及び情報検索行動についての基本的理解 4. レファレンスプロセス（レファレンス質問の受付から回答まで、マニュアル検索とコンピュータ検索を含む） 5. 情報検索サービスの方法、プロセス・評価 6. 主要な参考図書、データベースの解説と評価 7. 参考図書及びその他の情報源の組織（二次資料の作成にも触れる） 8. 各種情報源の特質と利用法			
<b>[成績評価の方法]</b>  定期試験の成績を主に、出席状況も加味して評価する。	<b>[参考文献]</b>  その都度指示する。			
<b>[教科書]</b>  西田文男監修、志保田 務・平井尊士編著 「情報サービス：概説とレファレンスサービス演習」 学芸図書				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報サービス演習		秋学期	1 単位	西 田 文 男
<b>[演習概要・学習目標]</b>  参考図書その他の情報源の利用や作成、レファレンス質問の回答処理の演習を通して、実践的な能力の養成を図る。	<b>[演習計画]</b>  タイプの異なる各種の演習問題を課し、回答を作成してもらおう。またそれを発表してもらおう。 1. 図書に関する質問 2. 逐次刊行物に関する質問 3. ことばと成句に関する質問 4. ものとなごころに関する質問 5. 時と歴史に関する質問 6. ところと地理に関する質問 7. ひとと機関に関する質問 8. 総合質問			
<b>[成績評価の方法]</b>  定期試験の成績を主に、出席状況、日常の発表等を加味して評価する。	<b>[参考文献]</b>  その都度指示する。			
<b>[教科書]</b>  西田文男監修、志保田 務・平井尊士編著 「情報サービス：概説とレファレンスサービス演習」 学芸図書				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報検索演習	01	7・8月集中	1単位	都築 泉
<p>〔演習概要・学習目標〕</p> <p>図書館の利用者に対するサービスとして、オンライン・オンディスクのデータベースの提供は、昨今必須である。データベースを利用して種々の情報を引き出す業務を担当する専門家はサーチャー（インフォメーション・スペシャリスト）と呼ばれ、大学図書館・公共図書館・企業内図書館などで活躍している。一方、図書館の役割としては、情報管理者としての立場から利用者が利用しやすい環境を整備することが求められている。ここでは、1級と2級の上級サーチャーの前段階としての情報検索基礎能力試験（（社）情報科学技術協会が行う）を目標において、実践を交えながら学習する。</p> <p>当講義の受講には、第1回の講義までに次の条件を満たしておくこと。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. E-mailアドレスを取得しておくこと（学内LANのそれでもいい）。</li> <li>2. パソコンキーボードの操作・入力ができること。</li> </ol>	<p>〔演習計画〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス 情報管理概論</li> <li>2. データベース概論、情報の検索と利用に関する知識、</li> <li>3. 情報検索の基本Ⅰ（主題分析、分類、キーワード、一時情報と二次情報）</li> <li>4. 情報検索の基本Ⅱ（検索式、コマンド）</li> <li>5. 情報検索の実際Ⅰ-図書、雑誌</li> <li>6. 情報検索の実際Ⅱ-新聞記事、雑誌記事、企業情報</li> <li>7. 情報検索の実際Ⅲ-人物情報、生活情報、趣味、その他</li> <li>8. 特許情報</li> <li>9. 海外のオンライン情報検索システム</li> <li>10. インターネットの利用</li> <li>11. 情報の活用</li> <li>12. 情報検索担当者の企業での役割</li> </ol>			
<p>〔成績評価の方法〕</p> <p>テスト 70%</p> <p>課題 20%</p> <p>出席 10%</p>	<p>〔参考文献〕</p> <p>「情報活用術：情報検索 情報処理の楽々実行」（学芸図書）2300円 編著者：志保田 務・平井尊士・中崎修一</p> <p>「最新オンライン情報源活用法」（日外アソシエーツ）2000円</p>			
<p>〔教科書〕</p> <p>「情報検索の基礎知識」（情報科学技術協会）2000円</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報検索演習	02	春学期	1単位	志保田務
<p>〔演習概要・学習目標〕</p> <p>現代社会は、情報化、コンピュータ化のただ中にある。オンライン、オンディスクのデータベースは図書館にとって常識化している。データベースに関する知識と、その扱いについてここでは学ぶ。さらに検索の専門家サーチャーへの登竜門となる情報検索基礎能力試験をも目指す。</p> <p>各分野の専門家によるインテグレーション授業として、INFOST（情報科学技術協会）の中心メンバーの指導を受ける。第2回目以後の授業では、情報センターのコンピュータ演習室を使用する。</p> <p>この授業の受講を始めるには、第1回講義までに、次の条件を満たしておくこと。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. パソコンキーボードの操作、入力ができる。</li> <li>2. E-MAILの受発信ができる。</li> </ol>	<p>〔演習計画〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報検索演習概説</li> <li>2. 情報処理基本技術</li> <li>3. 検索式（コマンド）</li> <li>4. 一次情報と二次情報</li> <li>5. 図書情報、雑誌・新聞記事の検索</li> <li>6. 企業、人物情報とその検索1（日本のDB）</li> <li>7. 企業、人物情報とその検索2（外国のDB）</li> <li>8. 医学薬学情報とその検索</li> <li>9. 特許情報とその検索</li> <li>10. 生活情報とその検索</li> <li>11. 情報検索と英語</li> <li>12. サーチャー試験案内</li> <li>13. まとめ</li> </ol>			
<p>〔成績評価の方法〕</p> <p>テスト70% 課題 20% 出席 10%</p>	<p>〔参考文献〕</p> <p>志保田務編著『情報機器論・特論：メディアの活用』（第一法規）</p>			
<p>〔教科書〕</p>				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報検索演習	03	秋学期	1単位	中崎 修一
<p><b>[演習概要・学習目標]</b>            現在、多様化した情報資源を活用する能力は必須となっている。特に、ネットワークを利用することで、場所を移動することなく、世界中の様々な情報源から必要な情報を瞬時に収集できるようになった。            本演習では、情報の読み方や多種多様な情報の検索を通じて、情報源の調査、情報収集の手法と多様化した情報源へのアクセス法の習得を図ると同時に、実践的な技術の習得を図ることを目的とする。            レポート提出および連絡を電子メールで行うため、基本的なパソコンおよび電子メールの利用を習得していることを前提とする。</p>	<p><b>[演習計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報化社会と情報メディア</li> <li>2. 情報検索概説</li> <li>3. 一時情報と二次情報</li> <li>4. データベース基礎</li> <li>5. 情報検索の論理</li> <li>6. インターネットと情報検索</li> <li>7. 情報検索の実際：図書情報</li> <li>8. 情報検索の実際：雑誌情報</li> <li>9. 情報検索の実際：新聞情報</li> <li>10. 情報検索の実際：学術情報</li> <li>11. 情報検索の実際：その他</li> <li>12. まとめ</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b>            課題提出、筆記試験、出席から総合的に判断する</p>	<p><b>[参考文献]</b>            志保田務・平井尊士編著『情報機器論・特論：メディアの活用12章』（第一法規）            『情報検索の基礎』第2版（情報科学技術協会）            『最新オンライン情報源活用法』（日外アソシエーツ）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料目録法		春学期	2単位	北 克 一
<p><b>[講義概要・学習目標]</b>            図書館は資料・情報を収集・整理・保存し、提供する社会的記憶装置である。図書館活動を基礎で支える資料・情報の組織化につき、その意義の理解を進め目録法等の基礎知識を獲得すると共に、ネットワーク時代の資料・情報組織化の最新状況の理解を目標とする。            ネットワークの進展と情報のデジタル化は、図書館という概念の「一般化」を及ぼし、図書館活動は、検索エンジン、ネットワーク出版、デジタル・アーカイブなど情報知識産業との競合・協同へと変化しつつある。図書館活動を支える目録法等の基礎知識に理解に止まらず、ネットワーク時代の資料・情報組織化の現状を講義する。聞き慣れない専門用語が頻出するが、挫けないで努力してほしい。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>講義計画</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 書誌コントロールと資料組織化の目的・意義、歴史</li> <li>2. 目録の機能、目録規則の構成原理、その適用</li> <li>3. 典拠コントロールの目的と機能</li> <li>4. 書誌レコードと典拠ファイル</li> <li>5. 機械化、総合目録、インターライブラリー・ローンへの展開</li> <li>6. 電子ジャーナル、電子図書館、メタデータなど</li> <li>7. まとめ</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b>            試験</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>参考文献</p> <p>日本図書館情報学会研究委員会編『電子図書館』勉誠社、2001。            井上如〔ほか〕著『学術情報サービス-21世紀への展望-』丸善、2000。</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>木原通夫〔ほか〕著『資料組織法 第5版』第一法規出版、2002.4。            ＊志保田先生、担当科目「資料組織概説（分類）」と共通です。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料分類法		春学期	2 単位	吉田 憲一
[講義概要・学習目標]	[講義計画]			
<p>「Books are for use」（インドの分類学者ランガタンの図書館学の第一法則）との余りに当然と思われる命題も真となってまだわずか百数十年を経過するにすぎない。膨大な図書館資料を迅速かつ有効に利用できるためには、図書館資料の排架方法を知り、主題から資料にアクセス（検索）するための理論を会得することが第一に必要である。ネットサーフィンが普及した現在、この主題検索への興味は社会的に大変な高まりを見せている。</p> <p>そしてこの主題検索の理論は、大別すると分類法と件名法に2分される。この科目では、両者に共通する主題検索の基本的な考え方を学んでもらうことを目的とする。</p>	<p>今日の多くの大学図書館で利用に供されているOPAC（オンライン閲覧目録）の時代にマッチした理論として考えていきたい。</p> <p>7) 分類法</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 資料分類の意義</li> <li>2. 基礎的理論：分類の構成原理</li> <li>3. 世界の代表的な分類表</li> <li>4. 分類表の作成</li> <li>5. 日本十進分類法：助記法およびその構造</li> <li>6. 関連索引等</li> </ol> <p>1) 件名法</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 分類法と件名法の比較</li> <li>2. 件名標目表とシソーラス</li> <li>3. 基本件名標目表</li> </ol>			
[成績評価の方法]	[参考文献]			
出席および最終講義時のテスト結果で評価する。	丸山昭二郎編 『主題情報へのアプローチ』（雄山閣）			
[教科書]				
木原通夫ほか著 『資料組織法 最新版』（第一法規出版）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料目録法演習	0 1	秋 学 期	1 単 位	北 克 一
	0 2	秋 学 期	1 単 位	
[演習概要・学習目標]	[演習計画]			
<p>資料組織概説（目録）で学習した目録規則、典拠コントロールなどを目録作成の演習を通して、目録に対する理解・経験を深めることを目的とする。</p> <p>実際に書誌ユーティリティを使用し、書誌データベース構築を基礎演習する。コンピュータを使用する演習になるので、キーボード入力、かな漢字変換、マウス操作などを事前に学習しておくことが望ましい。積み上げ学習なので、途中欠席をしないこと。</p> <p>各人の演習データ保存用に、新規のフロッピー・ディスク(3.5インチ/2HD)を必ず持参のこと。（半年間の演習成果を記録します。）</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. カード目録作成演習と記述、標目概念の理解</li> <li>2. 書誌ユーティリティのシステムと参加図書館の役割</li> <li>3. 書誌レコード、典拠レコードの検索演習</li> <li>4. 和図書所蔵登録・流用入力・新規入力演習</li> <li>5. 洋図書所蔵登録・流用入力・新規入力演習</li> <li>6. 和雑誌所蔵登録演習・洋雑誌所蔵登録演習</li> <li>7. 典拠コントロール演習</li> <li>8. OPAC構築演習</li> <li>9. まとめ</li> </ol>			
[成績評価の方法]	[参考文献]			
提出演習課題と理解テストの総合で評価する。	根本 彰著『文献世界の構造』勁草書房、1998.			
[教科書]				
北 克一著『資料組織演習 改訂新版2刷』M.B.A., 2003. 7.				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
資料分類法演習		秋学期	1 単位	吉田 憲一
[演習概要・学習目標] 後期の演習（分類法）では、資料の内容（主題）にかかわる検索のためのおよび「基本件名標目表」（BSH）を用いて授業を進める。毎回、演習課題を課して、それへの解答作成を通じて、主題組織化の実際を学習してもらうことをねらいとする。	[演習計画] 1. 主題組織化のための2つの方法 分類法と件名法比較 2. 分類法 ①分類作業 ②一般分類規程 ③特殊分類規程 ④各類演習 ⑤別置法・図書記号法 3. 件名法 ①件名作業 ②件名規程			
[成績評価の方法] 授業時に行う演習問題の解答レポートと、テストで総合評価する。	[参考文献] 日本図書館協会編刊 『日本十進分類法 新訂9版』 日本図書館協会編刊 『基本件名標目表 第4版』			
[教科書] 吉田憲一編著 『資料組織演習 新訂版』（日本図書館協会） （JLA図書館情報学テキストシリーズ10）				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
情報機器論		秋学期	2 単位	藤間 真
[講義概要・学習目標] 近年の図書館は、単なる紙の集積ではない。色々な情報機器によって装備されている。そのことは、本学の図書館に1歩入って周りを見渡すだけでわかるであろう。言い換えると、情報機器に関する知識はこれからの司書にとって不可欠の知識である。 本講の目的は図書館における情報機器に関する基本的な知識の修得である。単なる現状追認に終わらず、司書としての人生に役立つよう本質的な理解を目指す。そのために、単純な一方通行の講義ではなく、主体的に自分の頭で考えることを要求する講義運営を目指す。 具体的な計画は右欄の通りであるが、コンピュータの世界の変化と講義の進展の状態に応じて変更することもありうる。 なお、受講生への連絡は大学のメールを用いるので最低限の操作はできるようになっていることを前提とする。	[講義計画] ・本講義で要求するレポートのレベルについて ・情報を機械で扱うとは ・図書館学の五法則と情報機器 ・図書館で使われる情報機器 ・情報処理システムの基礎知識 ・パソコンの基礎知識 ・視覚機器とプレゼンテーション			
[成績評価の方法] 学期末レポートを主に、平常成績を加味し総合的に判断する。	[参考文献] 進行状況に応じて指示する。 尚、講義に必帯とはしないが、 志保田務・平井尊士 編著 図書館と情報機器・特論：情報メディアの活用第一法規 に目を通すことは要求する。			
[教科書]				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー プ
学校図書館論I (学校経営と学校図書館)		春学期	2単位	志保田 務
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>学校図書館に関する総論である。学校図書館について総括的に把握するとともに、「司書教諭科目」の基礎科目という視点から学んで行く。「講義計画」に記したよう講義を展開する。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 学校経営と学校図書館 (総論)</li> <li>2 学校図書館と法規・基準 (1)</li> <li>3 学校図書館と法規・基準 (2)</li> <li>4 学校図書館の管理運営 (1)</li> <li>5 学校図書館の管理運営 (2)</li> <li>6 学校図書館の管理運営 (3)</li> <li>7 司書教諭、学校司書の働き</li> <li>8 学校図書館の授業への寄与 (1)</li> <li>9 学校図書館の授業への寄与 (2)</li> <li>10 学校図書館の授業への寄与 (3)</li> <li>11 学校図書館をめぐるネットワーク (1)</li> <li>12 学校図書館をめぐるネットワーク (2)</li> <li>13 まとめ (テスト)</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>レポートとテストによる</p>				
<p>[教科書]</p> <p>山本順一編著『学校経営と学校図書館』学文社 2002年 1800円 (大学生協で購入すること)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
学校図書館論II (学校図書館メディアの構成)		秋学期	2単位	志保田 務
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>本科目は、学校図書館法のもとの学校図書館司書教諭講習科目「学校図書館メディアの構成」にあたる。次のような概要と学修目標を有する。</p> <p>&lt;内容&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 学校図書館メディアの種類と特性</li> <li>2) 学校図書館メディアの選択と構成</li> <li>3) 学校図書館メディアの組織化</li> </ol> <p>資料配列法： 書架分類法：日本十進分類法 (NDC) 図書記号法 別置法</p> <p>資料目録法： 主題目録法 件名法：基本件名目録法 (BSH) 書誌分類法 名称による検索：日本目録規則 (NCR) 1987年版改訂版 著者検索 タイトル検索 キーワード検索 目録の機械化 多様な学修環境と学校図書館メディアでえ射垂の配置</p> <p>&lt;目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 学校図書館司書教諭の資格の取得</li> <li>2) それにふさわしい、資料組織化、資料構成に関する知識の取得</li> <li>3) 学校図書館の実際業務に役立つ知識の獲得</li> </ol>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 メディアの構成：資料論</li> <li>2 分類</li> <li>3 書架分類</li> <li>4 日本十進分類法 1</li> <li>5 同上 2</li> <li>6 分類法演習 1</li> <li>7 同上 2</li> <li>8 目録法</li> <li>9 同上 (タイトル目録)</li> <li>10 同上 (著者目録)</li> <li>11 同上 (件名目録)</li> <li>12 機械化目録</li> <li>13 多様な学習環境と学校図書館メディア</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>テスト70% 課題応答20% 出席10%</p>	<p>[参考文献]</p> <p>木原通夫 [ほか] 『資料組織法』 第一法規 2002</p> <p>高鷲忠美 [ほか] 『学校図書館メディアの構成』放送大学教育振興会 2000</p>			
<p>[教科書]</p> <p>木原通夫、志保田務『分類・目録法入門：メディアの構成』第一法規 2002</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
学校図書館論Ⅲ（学習指導と学校図書館）		春 学 期	2 単 位	林 陸 雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>学校図書館の役割は、児童・生徒の読書意欲を高め、各教科の学習指導、調べ学習、総合学習等の学習指導に寄与することにある。そのためには、常に読書ニーズや学習目的を点検し、それに合った図書・資料を選択・収集し、適切に活用できる環境を整える必要がある。さらに、彼らの学習を深め、その結果を発表する能力を育成することも求められている。この講義では、計画的な図書館運営とメディア活用能力育成のための指導について、その基本と実際をとりあげる。</p> <p>授業の展開に当たっては、現場で実践されている先生を、ゲスト講師として適宜お招きする。</p> <p>なお、学校図書館司書の役割と能力は幅広く奥深いものであるから、基礎資格に教員免許を必要とし、教員としての実務経験を10年ほど得ないことには、十全にその役割を遂行し得ないことを充分に認識しておくこと。教員免許と学校司書教諭免許があれば、大学新卒でもその専門職として採用され、直ちにその職務に就くことができるなどと、思いこまないでほしい。</p>		<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業びらき</li> <li>2. 教育課程の展開と学校図書館</li> <li>3. メディア活用能力の育成</li> <li>4. 小学校における実践1</li> <li>5. 小学校における実践2</li> <li>6. 小学校における実践3</li> <li>7. 中学校における実践1</li> <li>8. 中学校における実践2</li> <li>9. 中学校における実践3</li> <li>10. 学校図書館における情報サービス</li> </ol> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報の収集と提供</li> <li>2. まとめ（テスト）</li> </ol>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席状況、授業毎の小レポート、ならびに定期試験の結果を総合して評価する。ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>		<p>[参考文献]</p> <p>授業中に適宜紹介する。</p>		
<p>[教科書]</p> <p>志村尚夫監修 朝比奈大作 編著『学習指導と学校図書館』、樹村房</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
学校図書館論Ⅳ（読書と豊かな人間性）		秋 学 期	2 単 位	林 陸 雄
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>子ども達の豊かな心を醸成するに当たって、読書指導及び読書体験の深化は重要な役割を担っている。</p> <p>この授業では、子どもたちの読書ニーズを涵養し、読書活動を推進・援助し、人間性豊かな醸成に資する学校図書館活動の基本と実際についてとりあげる。授業の展開に当たっては、ゲスト講師を適宜お招きする。</p> <p>なお、学校図書館司書の役割と能力は幅広く奥深いものであるから、基礎資格に教員免許を必要とし、教員としての実務経験を10年ほど得ないことには、十全にその役割を遂行し得ないことを充分に認識しておくこと。教員免許と学校司書教諭免許があれば、大学新卒でもその専門職として採用され、直ちにその職務に就くことができるなどと、思いこまないでほしい。</p>		<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 読書と人間</li> <li>2. 読書資料の種類と活用</li> <li>3. 小学生への読書指導1</li> <li>4. 小学生への読書指導2</li> <li>5. 小学生への読書指導3</li> <li>6. 中学生への読書指導1</li> <li>7. 中学生への読書指導2</li> <li>8. 中学生への読書指導3</li> <li>9. 読み語り1</li> <li>10. 読み語り2</li> <li>11. 読み語り3</li> <li>12. 環境整備と連携</li> <li>13. まとめ（テスト）</li> </ol>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>授業毎の小レポート、定期試験の結果を総合して評価する。</p> <p>ただし、2/3以上の出席のないもの、遅刻早退の多いもの、授業に積極的に参加しないものは、評価の対象としない。</p>		<p>[参考文献]</p> <p>授業中に適宜紹介する。</p>		
<p>[教科書]</p> <p>志村尚夫 監修 赤星 隆子 編著『読書と豊かな人間性』、樹村房</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
精神科リハビリテーション学		秋学期集中	4 単位	栄 セツコ
<p>[講義概要・学習目標]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 精神科リハビリテーションの概念について理解させる。</li> <li>2 精神科リハビリテーションの構成について理解させる。</li> <li>3 精神科リハビリテーションのプロセスと技術について理解させる。</li> <li>4 精神保健福祉士が行うリハビリテーションについて理解させる。</li> <li>5 精神科リハビリテーションにおける連携について理解させる。</li> </ol>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 精神科リハビリテーションの概念                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) リハビリテーションの概念と歴史</li> <li>2) リハビリテーションの理念、意義と基本原則</li> <li>3) 精神科リハビリテーションの概念</li> <li>4) 精神科リハビリテーションの理念と意義</li> <li>5) 精神科リハビリテーションの基本原則と技法</li> <li>6) わが国及び諸外国の精神科リハビリテーションの現状</li> </ol> </li> <li>2 精神科リハビリテーションの構成                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 精神科リハビリテーションの対象</li> <li>2) 精神科リハビリテーションにおける精神保健福祉士の役割</li> <li>3) 精神科リハビリテーションに関わる専門職等との連携</li> <li>4) 精神科リハビリテーションの施設                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①病院リハビリテーション施設等</li> <li>②社会復帰施設及びその他の社会資源（小規模作業所、グループホーム、地域生活支援事業など）</li> <li>③精神保健福祉センター及び保健所</li> <li>④その他の協力機関、支援団体</li> </ol> </li> <li>5) 精神科リハビリテーションの関連領域</li> </ol> </li> <li>3 精神科リハビリテーションのプロセス                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) リハビリテーション計画</li> <li>2) アプローチの方法                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①病院におけるリハビリテーション</li> <li>②社会復帰施設及びその他の社会資源におけるリハビリテーション</li> <li>③地域におけるリハビリテーション</li> </ol> </li> <li>3) 疾病の経過、ライフサイクルと精神科リハビリテーション</li> </ol> </li> <li>4 医療機関におけるリハビリテーション                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 作業療法およびレクリエーション療法</li> <li>2) 集団精神療法</li> <li>3) 行動療法</li> <li>4) 認知行動療法（生活技能訓練を含む）</li> <li>5) 家族教育プログラム</li> <li>6) デイケアおよびナイトケア</li> <li>7) 精神科退院時指導、退院前訪問、訪問看護・指導</li> </ol> </li> <li>5 精神保健福祉士が行うリハビリテーション                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 精神保健福祉士に関わる医学的リハビリテーション                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①集団精神療法における精神保健福祉士</li> <li>②生活技能訓練における精神保健福祉士</li> <li>③デイケアおよびナイトケアにおける精神保健福祉士</li> <li>④訪問看護・指導における精神保健福祉士</li> <li>⑤社会復帰のための相談・助言・指導</li> </ol> </li> </ol> </li> <li>6 精神科リハビリテーションの総括化                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 地域リハビリテーション                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①地域ネットワーク</li> <li>②ケアマネジメント</li> <li>③地域生活支援事業と訪問援助</li> <li>④家族会および自助グループ</li> <li>⑤ボランティアの育成と活用</li> </ol> </li> <li>2) 職業リハビリテーション</li> <li>3) 精神保健福祉施策と精神科リハビリテーション</li> </ol> </li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席状況、レポート、試験を総合して評価する。</p>				
<p>[教科書]</p> <p>「精神科リハビリテーション学」精神保健福祉士養成講座編集委員会編 中央法規出版社</p>				
<p>[参考文献]</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
精神保健福祉援助技術各論		通 期	4 単位	重 野 勉
<p>[講義概要・学習目標]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 精神障害者の疾病及び障害に配慮した個別援助技術（ケースワーク）について具体的事例に基づき理解させる。</li> <li>2 精神障害者の疾病及び障害に配慮した集団援助技術（グループワーク）について具体的事例に基づき理解させる。</li> <li>3 精神障害者ケアマネジメントについて具体的事例に基づき理解させる。</li> <li>4 精神障害者を対象とした地域援助技術（コミュニティワーク）について具体的事例に基づき理解させる。</li> <li>5 精神障害者を対象とした援助技術について具体的事例に基づき理解させる。</li> </ol>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 精神障害者を対象とした個別援助技術（ケースワーク）                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 疾病及び障害に配慮した個別援助技術</li> <li>2) 個別援助技術の実際と適用分野</li> <li>3) 個別援助技術におけるスーパービジョン</li> <li>4) 具体的事例検討</li> </ol> </li> <li>2 精神障害者を対象とした集団援助技術（グループワーク）                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 疾病及び障害に配慮した集団援助技術</li> <li>2) 集団援助技術の実際と適用分野（生活技能訓練を含む）</li> <li>3) 集団援助技術におけるスーパービジョン</li> <li>4) 具体的事例検討</li> </ol> </li> <li>3 精神障害者を対象とした地域援助技術（コミュニティワーク）                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 地域援助技術の概念と基本的性格</li> <li>2) 地域援助技術の具体的展開                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①ノーマライゼーションの推進と住民参加</li> <li>②社会資源の活用と開発</li> <li>③地域社会における連携と調整機能</li> <li>④家族会、自助グループの支援</li> <li>⑤ボランティア等地域マンパワーの育成と活用</li> <li>⑥地域援助</li> </ol> </li> </ol> </li> <li>3) 具体的事例検討</li> <li>4 精神障害者のケアマネジメント                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ケアマネジメントの原則                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①ケアマネジメント</li> <li>②適用と対象</li> <li>③人権への配慮</li> </ol> </li> <li>2) ケアマネジメントの意義と留意点                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①ケアマネジメントの意義と留意点</li> <li>②関係機関との連携</li> </ol> </li> <li>3) ケアマネジメントのプロセス                             <ol style="list-style-type: none"> <li>①受理面接（インテーク）</li> <li>②ニーズの把握とその評価</li> <li>③目標設定と計画的実施</li> <li>④包括的サービスの実現</li> </ol> </li> </ol> </li> <li>4) チームケアとチームワーク</li> <li>5) 具体的事例検討</li> <li>5 精神障害者援助と関連専門職種との連携                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) チーム医療における精神保健福祉士の役割</li> <li>2) 専門職等の役割と機能</li> <li>3) チームアプローチ及び生活支援の理念と精神保健福祉士の役割</li> <li>4) 協力・連携による包括的保健・医療・福祉サービス</li> </ol> </li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>レポート提出</p>				
<p>[教科書]</p> <p>精神保健福祉士養成セミナー（第6巻） 『精神保健福祉援助技術各論』（へるす出版）</p>				
<p>[参考文献]</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
精神保健福祉援助演習		通 期	4 単位	栄 セツコ
<p>[演習概要・学習目標]</p> <p>1 精神保健福祉士の専門的援助技術及びリハビリテーション技法について、実技指導を中心とする演習形態により具体的事例を取り上げ、個別指導及び集団指導を通してその精度を高めつつ習得させる。</p> <p>2 学生自身が自分自身で学習し、考え、主体的に行動する態度を養成する。</p>	<p>[演習計画]</p> <p>精神障害者に対する援助技術及びリハビリテーション技法が学生個々に身につくよう、精神障害者の社会復帰に対する援助事例を取り上げるなどして、担当教員による個別指導並びに集団指導の下で、学生自身が積極的に報告し議論しあう形で事例研究およびロールプレイ等を行う。その際、次の点に留意する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 実習前においては、少なくとも精神病院等保健・医療施設及び社会復帰施設等福祉施設における精神障害者援助技術のモデル的な事例を取り上げ、講義の内容を深め、実習の教育効果が上るようにする。</li> <li>2 演習を通して援助関係の実際及びチーム医療の実践を身につけるようにする。</li> <li>3 実技指導等                     <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 面接実技指導</li> <li>(2) 記録実技指導</li> <li>(3) 集団実技指導</li> <li>(4) 評価・効果測定実技指導</li> </ol> </li> <li>4 精神保健福祉士としての、職業倫理についての理解を身につけるようにする。</li> <li>5 実習後においては、実習総括をふまえて、精神障害者に対する援助技術及びリハビリテーション技法をより深く身につけさせるようにする。</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席・参加状況、レポート、試験を総合して評価する。</p>				
<p>[教科書]</p>	<p>[参考文献]</p>			

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
精神保健福祉援助実習	0 1	通 期	6 単位	郭 麗 月
<p>[講義概要・学習目標]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 現場体験を通して精神保健福祉士として必要な知識及び技術並びに関連知識の理解を深める。</li> <li>2 精神保健福祉士として必要な知識及び技術並びに関連知識を実際に活用し、精神障害者に対する相談援助及びリハビリテーションについて必要な資質・能力・技術を修得する。</li> <li>3 職業倫理を身につけ、専門職としての自覚に基づいた行動ができるようになる。</li> <li>4 具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系だてていくことができる能力を涵養する。</li> <li>5 関連分野の専門職種との連携のあり方を理解する。</li> </ol>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 実習オリエンテーション</li> <li>2 視覚学習</li> <li>3 現場体験学習</li> <li>4 見学実習（急性期病棟など）</li> <li>5 専門援助技術実習指導</li> <li>6 リハビリテーション実習指導</li> <li>7 配属実習</li> <li>8 全体総括</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>全出席（学内・学外）を条件とする。実習記録、実習レポート、実習研究報告、実習先評価を総合して評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>適時紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編 精神保健福祉士養成セミナー 第3巻 「精神保健福祉援助実習」 (へるす出版)</p>				

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
精神保健福祉援助実習	02	通期	6単位	栄 セツコ
<p>[講義概要・学習目標]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 現場体験を通して精神保健福祉士として必要な知識及び技術並びに関連知識の理解を深める。</li> <li>2 精神保健福祉士として必要な知識及び技術並びに関連知識を実際に活用し、精神障害者に対する相談援助及びリハビリテーションについて必要な資質・能力・技術を修得する。</li> <li>3 職業倫理を身につけ、専門職としての自覚に基づいた行動ができるようにする。</li> <li>4 具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系だてていくことができる能力を涵養する。</li> <li>5 関連分野の専門職種との連携のあり方を理解する。</li> </ol>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 実習オリエンテーション</li> <li>2 視聴覚学習</li> <li>3 現場体験学習</li> <li>4 見学実習（急性期病棟など）</li> <li>5 専門援助技術実習指導</li> <li>6 リハビリテーション実習指導</li> <li>7 配属実習</li> <li>8 全体総括</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>全出席（学内・学外）を条件とする。実習記録、実習レポート、実習研究報告、実習先評価を総合して評価する。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>適時紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>特になし</p>				

科目名	クラス	講義区分	単位数	担当者
音声学・音韻論（旧英語音声学）		春学期集中	4単位	南條 健助
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>音声学 (phonetics) とは、音声を科学的に研究する言語科学 (linguistic sciences) の一分野であり、同時に、あらゆる音声を正確に聞き分け、かつ発音し分けることができる、いわば職人芸 (art) でもある。また、イギリス学派音声学 (British school of phonetics) では、音韻論 (phonology) も音声学の一部であると見做される。</p> <p>この授業では、イギリス学派の伝統である実践音声学 (practical phonetics) というやり方によって、標準的なアメリカ英語の音声を、主として調音 (articulation) の面から研究する。実践音声学の手法を用いるためには、まず初めに、たとえ日本人であっても、アメリカ人と区別がつかないくらい、アメリカ人そっくりの発音ができる技能を身につけなければならない。授業では、どうすればそういう発音ができるようになるのかを詳しく解説し、そのための音声学訓練 (phonetic training) に、多くの時間を割くつもりである。また、そのような訓練と並行して、毎回少しずつ音学の理論と英語の音声事実を勉強していくことにしたい。</p>	<p>[講義計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 入門編</li> <li>2. 強勢とリズム</li> <li>3. 音調</li> <li>4. 音のつながりと音変化</li> <li>5. 子音</li> <li>6. 母音</li> <li>7. 発展編</li> </ol>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>原則として、定期試験（80％）と提出課題や小テスト（20％）を総合して評価する。定期試験では、欠かさず授業に出席して、きちんとノートを取っていない場合は解答できない問題を出題する。また、8回以上欠席した者には、定期試験の成績にかかわらず、単位は与えられない。授業中、私語をする学生には即座に退室してもらい、その日は欠席扱いとする。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>授業中に紹介する。</p>			
<p>[教科書]</p> <p>開講時までに指定する。</p>				



科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語教授法Ⅰ		秋学期集中	4単位	有川康二
<p><b>[講義概要・学習目標]</b>          どんな教授法（教え方の哲学や方法）、どんな教科書にも長所と短所がある。要は、様々な教授法や教科書の長所をなるべく多く利用することである。ここでは、日本語の初級文法に焦点を絞り、（教師にとっての）実践的な文法整理と、（学習者にとって）効果的なドリルの紹介やシミュレーションを行う。</p> <p>一定の制限された状況（＝教室内）や時間内（初級の集中コースとして例えば週15時間の約6か月）に、日本語を母語としない人に日本語文法全体の基礎的な体系を順序よく説得的に説明し、効果的に練習を行い、「使える日本語」を身につけてもらうためには、教える側に特別な知識と技術が必要となる。何語でもそうだが、ある言葉が話せることと、その言葉を外国語として他者に体系的、説得的に教えることができる能力とは別物である。同時に、「何故、自分は外国語を学ぶのか？何故、自分は日本語を外国語として教えるのか？」という問いを問いつけなくてはならない。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <p>指示表現（こそあと）          形容詞          存在表現          時制（テンス）          保留形（テ形）          願望の助動詞ta/gar          可能の助動詞e/rare          様態・推量の助動詞soo/yooda/rasii          テイル・テアル・テオク（窓が開いている・開けてある・窓を開けておく）          授受表現（やる・あげる・もらう）          態（受身・使役・使役受身）          条件表現（雨が降ったら・降るなら・降れば・降ると）          敬語（お読みになる・お読みする・なさる・いたす）</p>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>出席・筆記試験</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>三浦昭『初級ドリルの作り方』（凡人社）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>東京YMCA日本語学校（編）『入門日本語教授法』（創拓社）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語教授法Ⅱ (旧日本語教授法Ⅱ(2))		通 期	4単位	友 沢 昭 江
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>日本語学習者の多様化に対応するために、さまざまな教授法が導入され、多くの教材が開発されています。実際の教育に携わる者は、学習者の学習目標や言語背景を考慮に入れ、最も効果的な成果をあげるために最適な教授法や教材を選択する眼を持たなければなりません。さらには、市販の教科書や教材ではまかないきれない部分を補充するための自主作成教材を臨機応変に作成する能力も必要とされます。本講では主要な教授法について考察し、具体的な教授項目を示しながら、それが教科書でどのように導入されるかを紹介します。さらには現在使用されている主要な教科書の特徴の分析をグループに分かれて行います。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな外国語教授法と日本語教育</li> <li>・コースデザイン</li> <li>・教室活動—初級の教え方（発音／会話、文字／読解）              中上級の教え方（会話／聴解、読解／情報収集）</li> <li>・教科書・教材の分析</li> </ul>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>春学期末と学年末に試験を行います。それ以外にも授業への参加の姿勢、与えられた課題にしたがってのレポート作成、グループによる発表、および出席状況を総合的に考慮して評価を行います。</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>『はじめての日本語教育1：日本語教育の基礎知識』（高見澤孟、アスク）          『はじめての日本語教育2：日本語教育入門』（高見澤孟、アスク）          『初級ドリルの作り方』（三浦昭、凡人社）          『教え方の基本』（日本語教育演習シリーズ⑤、丸山敬介、凡人社）          『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（松岡弘監修、庵功雄他著、スリーエーネットワーク）          『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』（白川博之監修、庵功雄他著、スリーエーネットワーク）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>『よくわかる教授法』（小林ミナ、アルク）</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
日本語教授法Ⅲ		通 期	4 単位	友 沢 昭 江
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>本講では日本語学および日本語教授法関連の授業を受講した後、その知識や経験を総合して、実際の教育の場面で学習者とのようなインターアクションを行うかという、実践力の養成を目的とします。知識として獲得したことをいかに効果的に提示し、学習者のもつ多様なニーズや問題をどのように処理するかを、実際の授業形態の中で学びます。そのため、原則として日本語教授法Ⅰおよび日本語教授法Ⅱを終了した人のみ受講を認めます。</p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な教授法をビデオによるモデル授業を見ることを通して比較検討します。</li> <li>・グループに分かれて、基本的な教授内容をいかに実際の教育現場で教えるかを研究し、発表します。</li> <li>・グループ単位で、実際の授業を組み立て、模擬授業として発表します（二回）。</li> <li>・実際の日本語授業を見学したり、夏期・春期休暇中に学外(国内・海外)での教育実習（希望者のみ）を行います。</li> </ul>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学期初めにノートを作り毎回の授業の内容をまとめるほか、適宜出される課題もそこに書き込み、一カ月に一回程度の割合でノートを提出します。ノートの内容、出席状況、授業での意見発表などを総合的に判断します。</li> <li>・グループ単位で行う作業は、学生間の相互評価を行います。（各自が評価表に書き込み、それをクラスで閲覧してフィードバックとします。）</li> </ul>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>『教え方の基本』（丸山敬介、京都日本語学校）  『日本語教育論集』（吉田彌壽夫監修、学研）  『概説日本語教育』（遠藤織枝編、三修社）  『実践日本語教授法』（名柄迪監修、中西家栄子他、バベルブックス）  『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』（名柄迪他、アルク）  『子供のための日本語教育』（山本紀美子他、アルク）  『日本語教師をめざす人の日本語教授法入門』（石橋玲子、凡人社）  『日本語の地平線』（吉田彌壽夫古稀記念論集編集委員会、くろしお出版）  『日本語教育のための心理学』（海保博之他、新曜社）</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>特に指定しない。必要に応じて担当教員が用意し、配付します。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館概論		春学期	2単位	井 上 敏
<p><b>[講義概要・学習目標]</b></p> <p>学芸員課程の基幹科目である。はじめの講義で、学芸員課程の諸科目で何を学ぶのか、この「概論」の目的は何かについて、ガイダンスを行う。この講義では、博物館に関する最も基礎的な知識を学ぶ。  また本講義においては博物館に行ってもらい、見学レポートを2本書いて、提出してもらおう。その締め切りは4月末、5月末の予定である。  <b>※見学レポートを提出しなかった者は本講義を放棄したものとみなすので、十分注意すること。</b></p>	<p><b>[講義計画]</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館の目的と機能</li> <li>2. 博物館の歴史</li> <li>3. 博物館の現状</li> <li>4. 博物館倫理</li> <li>5. 博物館関係法規</li> <li>6. 生涯学習と博物館</li> </ol>			
<p><b>[成績評価の方法]</b></p> <p>出席を含む受講態度とレポート、及び試験</p>	<p><b>[参考文献]</b></p> <p>倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』東京堂出版(1997)  その他適宜指示する。</p>			
<p><b>[教科書]</b></p> <p>広瀬隆人(編)『博物館学基礎資料』樹村房(2001)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館学各論Ⅰ（旧博物館学各論）		春学期	2単位	水 口 薫
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年、博物館及び博物館相当施設が増え、社会におけるその機能、役割が注目されてきている。特に生涯学習、学校教育、研究活動において、その領域は拡大し、その必要性と相まって博物館への関心は高くなっている。新しい博物館像が模索される中でも、学芸員は博物館の基本機能である資料収集、保存、研究、教育・普及活動の知識と活用する能力が求められている。</p> <p>本講義では、博物館学芸員が身につける「博物館資料論」を内容とする。</p> <p>博物館学芸員が身につける博物館機能の構成要因の一つである博物館資料の収集・保管・展示等についての基礎知識の習得、調査・研究、教育・普及活動及び情報の意義と活用方法についての理解を図る。</p> <p>適時ビデオ資料を使用する。</p>		<p>[講義計画]</p> <p>「博物館資料論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館とは何か 博物館資料の概念</li> <li>2. 博物館資料の種類と特質</li> <li>3. 博物館資料の収集・調査と整理</li> <li>4. 博物館活動と資料情報</li> <li>5. 博物館資料の取り扱い方と製作</li> <li>6. 博物館資料の保存と劣化対策</li> <li>7. 虫菌害と防除対策</li> <li>8. 博物館資料の利用</li> <li>9. 展示の実際 1 展示と環境・条件</li> <li>10. 展示の実際 2 展示方法と照明</li> <li>11. 展覧会の企画と開催</li> <li>12. 博物館の危機管理と地震対策</li> <li>13. 資料論からみた博物館</li> </ol>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席を兼ねた小テスト（適時）、定期試験と出席点にて総合評価</p>		<p>[参考文献]</p> <p>『博物館学教程』大堀哲編（東京堂出版） 『博物館学概説』網干善教編（関西大出版部）</p> <p>その他、講義の時に提示する。</p>		
<p>[教科書]</p> <p>「博物館ハンドブック」（雄山閣）加藤有次、椎名仙卓（編）</p> <p>適時、プリントを配布。</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
博物館学各論Ⅱ（旧博物館学各論）		秋学期	2単位	水 口 薫
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>近年ミュージアム・マネージメントという研究活動領域が拡大している。生涯学習の必要性と相まって博物館への関心は高く、博物館でも教育・福祉・援助・環境保護などあらゆることにマネージメント感覚が求められている。</p> <p>本講義では、博物館学芸員が身につける「博物館経営論」「博物館情報論」を内容とする。</p> <p>博物館学芸員が身につける博物館機能の構成要因の一つである博物館経営、教育・普及活動及び情報の意義と活用方法についての理解を図る。</p> <p>適時ビデオ資料を使用する。</p>		<p>[講義計画]</p> <p>「博物館経営論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 博物館の行財政</li> <li>2. 博物館経営の理念と方法（ミュージアム・マネージメント）</li> <li>3. 博物館の組織と職員及び施設・設備</li> <li>4. 博物館と利用者、地域社会との関係</li> <li>5. 博物館における教育普及活動の意義と方法</li> <li>6. 博物館における市民参加とボランティア 博物館友の会・後援会</li> <li>7. 博物館の出版活動</li> <li>8. 博物館の広報活動</li> </ol> <p>「博物館情報論」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9. 博物館における情報の意義</li> <li>10. 博物館における情報提供と活用の方法</li> <li>11. 博物館における情報機器とその利用</li> <li>12. 情報発信機関としての博物館</li> <li>13. 博物館の教育・普及活動における資料と情報</li> </ol>		
<p>[成績評価の方法]</p> <p>出席を兼ねた小テスト（適時）、定期試験と出席点にて総合評価</p>		<p>[参考文献]</p> <p>「ミュージアム・マネージメント 博物館運営の方法と実践」（東京堂出版） 大堀哲、小林達雄、端信行、諸岡博熊（編）</p> <p>その他、講義の時に提示する。</p>		
<p>[教科書]</p> <p>「博物館ハンドブック」（雄山閣）加藤有次、椎名仙卓（編）</p> <p>適時、プリントを配布。</p>				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー プ
博物館実習Ⅰ		9月集中	1単位	井上 敏
[講義概要・学習目標] 博物館資料の取り扱いや展示に関する基本的なことを学内、学外の施設で実習する。分野毎に専門の教員が担当して指導する。 予定している実習は「博物館資料の写真記録の撮り方」、「デジタル加工による博物館二次資料の作成」、「土器の復元」、「考古遺物の実測」、「文書資料の取り扱い」等である。	[講義計画] 9月中旬に5日間連続で実施する。詳細な日程については追って発表するので、注意すること。			
[成績評価の方法] 全出席が原則である。主に実習ノートによって評価する。	[参考文献]			
[教科書]				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー プ
博物館実習Ⅱ		集中コース	1単位	井上 敏
[講義概要・学習目標] 多様な博物館の現状を理解するために、各種の博物館において見学研修を行う。専任教員が交代で引率し、出席の確認を取る。土曜、日曜または休暇中に実施する。総計で12回実施するが、そのうち4回は両コース共通、コース別にそれぞれ4回である。	[講義計画] 日程の詳細は追って発表するが、予定している博物館は下記の通りである。 両コース共通：和泉市いずみの国歴史館、大阪歴史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、国立民族学博物館。 産業文化コース：交通科学博物館、大阪ガス・ガス科学館、UCCコーヒー博物館、なにわの海の時空館。 東洋文化コース：和泉市久保惣記念美術館、堺市博物館、大阪城天守閣、大阪府立弥生文化博物館			
[成績評価の方法] 主に実習ノートによって評価する。	[参考文献]			
[教科書]				

《インテグレーション科目》

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 チ ー フ
博物館実習Ⅲ		集中コース	1単位	井上 敏
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>指定した博物館で5日間から1週間程度の館務実習を行う。実習先の博物館としては、高野山霊宝館、和泉市いずみの国歴史館、トヨタ博物館、大阪ガス・ガス科学館、なにわの海の時空館、等を予定している。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>4月のガイダンス時に、各人の実習館を決定する。実習は多くの場合、夏期休暇中に行われるが具体的日時や実習内容は各博物館によって大幅に異なり、同じ博物館でも年によって変更がある。</p> <p><u>※各実習館への交通費・宿泊費等は自己負担であるので、注意すること。</u></p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>実習館の評価と実習ノートによって評価する。</p>	<p>[参考文献]</p>			
<p>[教科書]</p>				



「大学英語入門 A」 使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
	葛原 香代子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	Shoko Miura Atsuko Yamazaki Koji Mizushima	<i>Say It Aloud!</i> 『基礎からのクイック・リス ポンス』	三修社

「大学英語入門 B」 使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
	渡邊 真理子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	羽鳥博愛	<i>English for You</i>	朝日出版社

英語 I (リーディング) 使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
01	川上 与志夫	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	佐藤哲三	<i>English Primer</i>	南雲堂
02	近藤 撰子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	宮野智端 他 編	<i>Welcome to USA TODAY</i> — 2004 Edition —	開文社出版
03	渡邊 真理子	経済・社会・経営 〈再履修クラス〉	Fun Volga	<i>"Domo, Domo" Paradise</i>	桐原書店

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
経済英語 I		通 期	2 単位	和田 肇
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>日本の経済は、今や世界経済と密接な関係にあります。今後、金、物、人、サービスの交流が益々活発になり、経済のみならず、ビジネス活動がグローバル化、高度化してきます。学生諸君は将来、国際社会で活躍するにあたり、パソコン操作の習得に加え、英語での交渉能力と英語で経済が読める能力を備え、幅広い教養を高めておく必要があります。これらの目的を達成するツールの一つとして、英字新聞が最適です。</p> <p>このクラスでは、英字新聞を通じ日本、世界経済の事象を学びます。記事の解説と同時に、文法、同義語、反意語にもふれていきます。日本のマスメディアとはやや異なる視点で世界を俯瞰しましょう。私が金融マンとして海外駐在中に学んだ米国、アジアでの経験が、将来国際部門で活躍したいと志しておられる学生さん達のお役に立てば幸いです。</p> <p>英語と日本語の新聞を読むのが好きな人の参加を期待します。但し、語学学習には、根気と知的好奇心が必要です。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>(前期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本企業の海外進出</li> <li>2. 企業買収、合併 (M&amp;A)</li> <li>3. リストラクチャリング</li> <li>4. 倒産</li> <li>5. 外食産業</li> <li>6. マーケティング</li> </ol> <p>(後期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>13. ベンチャービジネス</li> <li>14. 外国企業の日本進出</li> <li>15. 日本の景気動向</li> <li>16. 世界の景気動向</li> <li>17. 為替相場</li> <li>18. 銀行経営</li> </ol> <p>(注) 年間を通じ、時機を得た時事問題を織り込みます。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>前期、後期のレポート内容と出席状況に基づき総合的に評価を行う。語学学習には、根気と知的好奇心が必要です。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>英文記事の読み方 日本経済新聞社編/日経文庫          経済の英語 寺澤浩二/研究社出版          新コンササイズ時事英語辞典 三省堂/磯部 薫</p>			
<p>[教科書]</p> <p>不要 (当方にてプリントします)</p>				

科 目 名	クラス	講義区分	単位数	担 当 者
ビジネス英語 I		通 期	2 単位	和田 肇
<p>[講義概要・学習目標]</p> <p>今後、国際ビジネスマンになるための必須条件としてパソコンと世界の主流語である英語を駆使する能力が考えられます。</p> <p>英語を学習するにあたり、文法、単語といったハードウェアの重要性もさることながら、その言語が使用されている国の文化と人々の物の考え方を理解することつまりソフトウェアも理解しておくことが併せて大事です。</p> <p>将来、学生諸君がアメリカへ留学、駐在される際に、事前に日米の企業文化を理解しておくこと、不要なトラブルに巻き込まれずに、楽しい海外生活が過ごせます。私の海外勤務経験(米国、東南アジア)をもとに、企業の成功、失敗の実例についても説明します。</p> <p>教材としては、英字新聞、英文雑誌などを使い、記事の解説と同時に、文法、同義語、反意語、熟語にもふれていきます。</p> <p>英語と日本語の新聞を読むのが好きな人の参加を期待します。</p>	<p>[講義計画]</p> <p>(前期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ビザ(査証)の取得方法</li> <li>2. 自動車免許の取得方法</li> <li>3. 銀行口座の開設方法</li> <li>4. クレジットカードの取得方法</li> <li>5. 米国での支店、現地法人の設立方法</li> <li>6. 不動産購入方法</li> </ol> <p>(後期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>13. 弁護士の利用</li> <li>14. 企業買収 (M&amp;A)</li> <li>15. 株主代表訴訟</li> <li>16. 取締役責任</li> <li>17. 集団訴訟</li> <li>18. ベンチャービジネス</li> </ol> <p>(注) 年間を通じ、時機を得た時事問題を織り込む。</p>			
<p>[成績評価の方法]</p> <p>前期、後期のレポート内容と出席状況に基づき総合的に評価を行う。語学学習には、根気と知的好奇心が必要です。</p>	<p>[参考文献]</p> <p>英文記事の読み方 日本経済新聞社編/日経文庫          新コンササイズ時事英語辞典 三省堂/磯部 薫</p>			
<p>[教科書]</p> <p>不要 (当方にてプリントします)</p>				



## 〈文学部国際文化学科 学科自由科目〉

### 「英語Ⅲ（リーディング）（ライティング）（リスニング・スピーキング）」

#### － 応募要領 －

1. どのクラスも出席を重視します。一定の成果をあげるために、授業への継続的な出席が欠かせないからです。
2. これらの科目は、学則上文学部国際文化学科教育科目の「学科自由科目（2単位）」に位置づけられています。
3. 履修登録にあたっては以下のとおり事前に予備登録（先着順受付）が必要です。

対 象 者 ： 98～01LI生

科目と定員： ●英語Ⅲ（リーディング）は新カリキュラムの（リーディングⅣ） 40名  
●英語Ⅲ（ライティング）は新カリキュラムの（ライティングⅡ） 30名  
●英語Ⅲ（リスニング・スピーキング） 50名

予備登録日時： 3月23日（火） 9:10～15:00（11:30～12:30 昼休憩）

場 所： 教務課窓口

申込方法： 先着順に受付決定します。教務課窓口で申込書を受け取り、必要事項を記入の上提出してください。

- <注意> ① 学生証がないと受付できないので、必ず持参してください。  
② 申込みにあたっては、事前に授業時間割表で希望クラスの曜日・時限を確認し、当日クラス番号が言えるよう準備しておいてください。

〈文学部国際文化学科 学科自由科目〉

英語Ⅲ（リスニング・スピーキング）使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
	山本路恵	国際文化	浅川和也 他	<i>Inspiring English (2)</i>	金星堂

## 〈共通自由科目〉

### 「英語Ⅱ（リーディング）（ライティング）（リスニング・スピーキング）」 「英語Ⅲ（リスニング・スピーキング）」

#### － 応募要領 －

1. どのクラスも出席を重視します。一定の成果をあげるために、授業への継続的な出席が欠かせないからです。
2. これらの科目は、学則上「共通自由科目（日本語・外国語系）（2単位）」に位置づけられています。
3. 履修登録にあたっては以下のとおり事前に予備登録（先着順受付）が必要です。

対 象 者 : 98～01生（全学部・全学科）

定 員 : 各クラス50名

予備登録日時 : 3月23日（火） 9:10～15:00（11:30～12:30 昼休憩）

場 所 : 教務課窓口

申込方法 : 先着順に受付決定します。教務課窓口で申込書を受け取り、必要事項を記入の上提出してください。

＜注意＞① 学生証がないと受付できないので、必ず持参してください。

② 「英語Ⅲ（リスニング・スピーキング）」〈共通自由科目〉については、海外留学経験者もしくは、それと同等の語学力を有するものを対象とするアドヴァンストクラスですので注意してください。

③ 申込みにあたっては、事前に授業時間割表で希望クラスの曜日・時限を確認し、当日クラス番号が言えるよう準備しておいてください。

〈共通自由科目〉英語Ⅱ（リーディング）（ライティング）（リスニング・スピーキング）使用教科書一覧

〈共通自由科目〉英語Ⅲ（リスニング・スピーキング）使用教科書一覧

クラス	担当者	対象	著者名	使用教科書	出版社
英語Ⅱ〈リーディング〉					
	近藤 摂子		宮野智端 他 編	<i>Welcome to USA TODAY</i> — 2004 Edition —	開文社出版
英語Ⅱ〈ライティング〉					
	前田 淑江		榎本恭弘	英語演習手帳 作文編	大阪教育図書
英語Ⅱ〈リスニング・スピーキング〉					
	Louise Pender		Helgesen, Brown Mandeville	<i>English Firsthand</i> ISBN 962-00-1539X	Longman
英語Ⅲ〈リスニング・スピーキング〉					
	Jeffrey Herrick		Dale Fuller Clyde W. Grimm	<i>Milestones</i>	Macmillan Language House